

栗林 VIII 浜津ヶ池

中野市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1988.3

長野県中野市教育委員会

栗林 VIII 浜津ヶ池

中野市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

長野県中野市教育委員会

序

栗林遺跡並びに浜津ヶ池遺跡は、共に永峯丘陵上に存在する遺跡であり、周囲には安源寺遺跡を始め、高丘窯址群、七瀬古墳群等、市内でも貴重な遺跡が集中している地域であります。

このたび県営畑地帯総合土地改良事業に伴い、7月から浜津ヶ池遺跡、11月から栗林遺跡と調査を実施しました。

調査は、日本考古学協会員・中野市文化財保護審議会々長金井汲次先生を団長に、調査主任檀原長則氏、調査員池田実男氏、酒井健次氏にお願いするとともに、地域の大勢の方々の御協力を得て実施しました。

今回の調査で、県指定史跡であり、また北信濃弥生時代中期の栗林式土器の標式として有名である栗林遺跡の生活様相を再確認する貴重な資料が出土しました。

長期にわたる調査になり、一部農作物の生育・収穫時にあたりましたが、園地所有者並びに、地元支部役員等御協力を賜りました多くの方々に心から感謝を申し上げるとともに、報告書作成のためにご苦勞いただきました調査団の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

昭和63年 3月

中野市教育委員会

教育長 嶋 田 春 三

例 言

1. 本書は、中野市長と長野県下高井地方事務所長との委託契約にもとづき、中野市教育委員会が調査主体となり、編成した調査団によって行われた埋蔵文化財緊急発掘調査（県営畑地帯総合土地改良事業に伴う）報告書である。
2. 調査にあたり、地元栗林区を初め、地主の皆様、下高井地方事務所土地改良課、工事施工者の中野土建KK並びに中野興業KK、市役所各主管課から多くの援助をいただいた。
3. 本書は、報告書としての使命のほか、過去の栗林遺跡の研究資料の集積と、一般の方々の栗林遺跡の認識を啓発するという2点を主眼として編集した。
4. 本文中の遺構記号は、SK—土壌、SD—溝状遺構を表す。
5. 遺構図は、平板測量による $1/10$ の実測図を $1/30$ に縮図して掲載した。また全体図は、「県営畑地帯総合土地改良事業中野西部地区計画一般平面図」を利用し、 $1/4$ に縮図した。
6. 土器、石器等の遺物は主に、 $1/3$ の縮図とし、小形の遺物は $1/2$ を用いた。
7. 本書に関する写真撮影は、主として檀原長則、徳竹雅之によるものである。
8. 資料整理は調査員全員の協力によって行われ、主として復元は檀原、池田実男、実測は檀原、徳竹、トレースは酒井健次、栗原よしみ、山崎のり子、市村きよ子、徳竹が分担した。
9. 執筆は調査員が分担し、文責は執筆者にあり、氏名は文末に記した。
10. 調査の実測図・写真・遺物等、中野市歴史民俗資料館で整理、保管している。

目 次

序

例 言

目 次

挿 図 目 次

表 目 次

図 版 目 次

調査の経過

1 発掘調査に至るまでの経過	1
2 調査団の編成	2
3 調査計画及び内容	3

調査地周辺の環境

1 遺跡の立地	5
2 遺跡の歴史的環境	5

栗 林

第1章 はじめに

第1節 調査日誌	11
第2節 層 序	12
第3節 研究史概説	16

第2章 遺構と遺物

第1節 遺 構	22
第2節 遺 物	24

第3章 結 語	51
---------	----

浜津ヶ池

第1章 はじめに

第1節 調査日誌	55
第2節 層序	56
第3節 研究史概説	59

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構	60
第2節 遺物	62

第3章 結語	66
--------	----

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	4
第2図 栗林遺跡調査地全体図（折り込み）	13
第3図 栗林遺跡土層柱状図	15
第4図 栗林遺跡従前調査位置図	19
第5図 22-9 遺構写真	22
第6図 25-6-7 遺構写真	23
第7図 長野市松節・平柴平遺跡出土土器	31
第8図 栗林遺跡既出土器（神田）	32
第9図 栗林遺跡既出土器（桐原）	33
第10図 栗林遺跡既出土器（桐原）	34
第11図 栗林遺跡既出土器（上・桐原、下・坪井）	35
第12図 昭和62年調査出土土器実測図	36
第13図 昭和62年調査出土土器実測図	37
第14図 昭和62年調査出土土器拓影図	38
第15図 昭和62年調査出土土器拓影図	39
第16図 昭和62年調査出土土器拓影図	40

第 17 図	昭和 62 年調査出土土器拓影図	41
第 18 図	昭和 62 年調査出土土器拓影図	42
第 19 図	刺突文に織布痕のある土器片	42
第 20 図	昭和 62 年調査出土土器拓影図	43
第 21 図	本誓寺跡位置図	47
第 22 図	栗林遺跡出土石器実測図	49
第 23 図	栗林遺跡出土石器・五輪塔実測図	50
第 24 図	浜津ヶ池遺跡土層模式図	56
第 25 図	浜津ヶ池遺跡調査地全体図	57
第 26 図	浜津ヶ池遺跡B-20～22 遺構写真	60
第 27 図	浜津ヶ池遺跡G-7 遺構写真	61
第 28 図	浜津ヶ池遺跡B-5 遺構実測図	63
第 29 図	浜津ヶ池遺跡B-8～10 遺構実測図	63
第 30 図	浜津ヶ池遺跡B-20～22 遺構実測図	63
第 31 図	浜津ヶ池遺跡B-23 遺構実測図	64
第 32 図	浜津ヶ池遺跡Gブロック遺構実測図	64
第 33 図	浜津ヶ池遺跡Gブロック遺構下層実測図	64
第 34 図	浜津ヶ池遺跡Fブロック遺構実測図	65
第 35 図	浜津ヶ池遺跡G-7 遺構実測図	65
第 36 図	浜津ヶ池遺跡出土石器実測図	65

表 目 次

第 1 表	周辺遺跡表	6
第 2 表	発掘調査史一覧表	21
第 3 表	縄文時代晩期～弥生時代の編年表	25

図 版

第 1 図	昭和 62 年出土土器	69
-------	-------------	----

調 査 の 経 過

1. 発掘調査に至るまでの経過

当市の農業はりんご・ぶどう・アスパラガス・エノキダケ等々に農家自ら画期的な栽培技術を生み出し、農業の先進的な経営で全国に広く知られている地帯である。

畑作の大半を占める果樹、アスパラガス栽培は、干ばつ等の気象条件に大きな被害を受け易く、又道路網が不整備のため、基幹の畑地かんがい事業と合わせて農道整備事業を行い、農産物の流通を合理化し、近代的農業の基盤を確立して農業経営の安定をはかることを目的として、畑地帯総合土地改良事業が実施され、大きな成果を上げている。

中野西部丘陵地帯（長丘、高丘）においても、収益性の高い近代的農業の基盤を確立して農業経営の安定をはかるため、昭和54年から土地改良事業が進められており、昭和62年度には、県史跡栗林遺跡並びに浜津ヶ池遺跡範囲内において畑地かんがい事業が実施されることになった。

昭和61年10月1日、事業主体である下高井地方事務所職員を初め、関係者立会いのもと現地協議を行った結果、工事施工の前に発掘調査を実施し、記録保存をはかることになった。

昭和62年4月栗林遺跡について、県史跡現状変更を進達し、同年5月13日付許可があり6月29日両遺跡について委託契約を締結し、発掘通知等必要な手続きを完了した。

この調査は、地下の遺構破壊を最小限とすることを目的に浜津ヶ池遺跡については、配管工事の幅員（上面70cm、底面50cm、深さ80cm）に調査地区を限定し、栗林遺跡については、県の史跡であることから県の指導を受け、地元土地所有者及び工事主体の御理解をいただき特に工事幅員を30cm、深さ45cmに計画変更をし、調査もその範囲内に限定した。

なお、浜津ヶ池遺跡については、7月1日にまた栗林遺跡については、9月7日に調査団の編成を行い、関係地主並びに多くの関係者に発掘作業への協力を要請し、作物・収穫作業への影響を最小限にするよう配慮し、時期差を持ちながら発掘調査を開始することになった。

（徳竹 雅之）

2. 調査団の編成

調査責任者 嶋田春三（教育長）
調査団長 金井汲次（日本考古学協会・中野市文化財保護審議会会長）
調査主任 壇原長則（日本考古学協会）
調査員 池田実男（長野県考古学会）
酒井健次（長野県考古学会）
事務局 酢谷康雄（社会教育課長）
小林紀夫（同 歴史民俗資料館管理係長）
徳竹雅之（同 学芸員）
協力団体 栗林区
参加者 藤沢英夫、金井英男、春日英男、高山一雄、阿藤英奈、阿藤きみ、馬場ハナ、
栗原よしみ、古田 茂、阿藤千代江、阿藤仁子、樋口政勝、馬場八重子、馬場
阿清、栗原はつ子、豊田美紀、割田弥生、神戸由美子、湯本浩子、小越美智代、
小山有里、清水さゆり、山崎のり子、市村きよ子

本調査にあたっては、小野沢京二（西部土地改良区栗林支部長）、清水継雄（同役員）、
石川高義（同役員）、地主各位、工事施行業者の中野興業（株）、同じく中野土建（株）、
土地改良区の皆様には格別のご配慮をいただき、また参加者には鋭意協力を賜り、大きな成
果をもって完了できたことを記して感謝申し上げる次第である。（徳竹 雅之）

3. 調査の計画及び内容

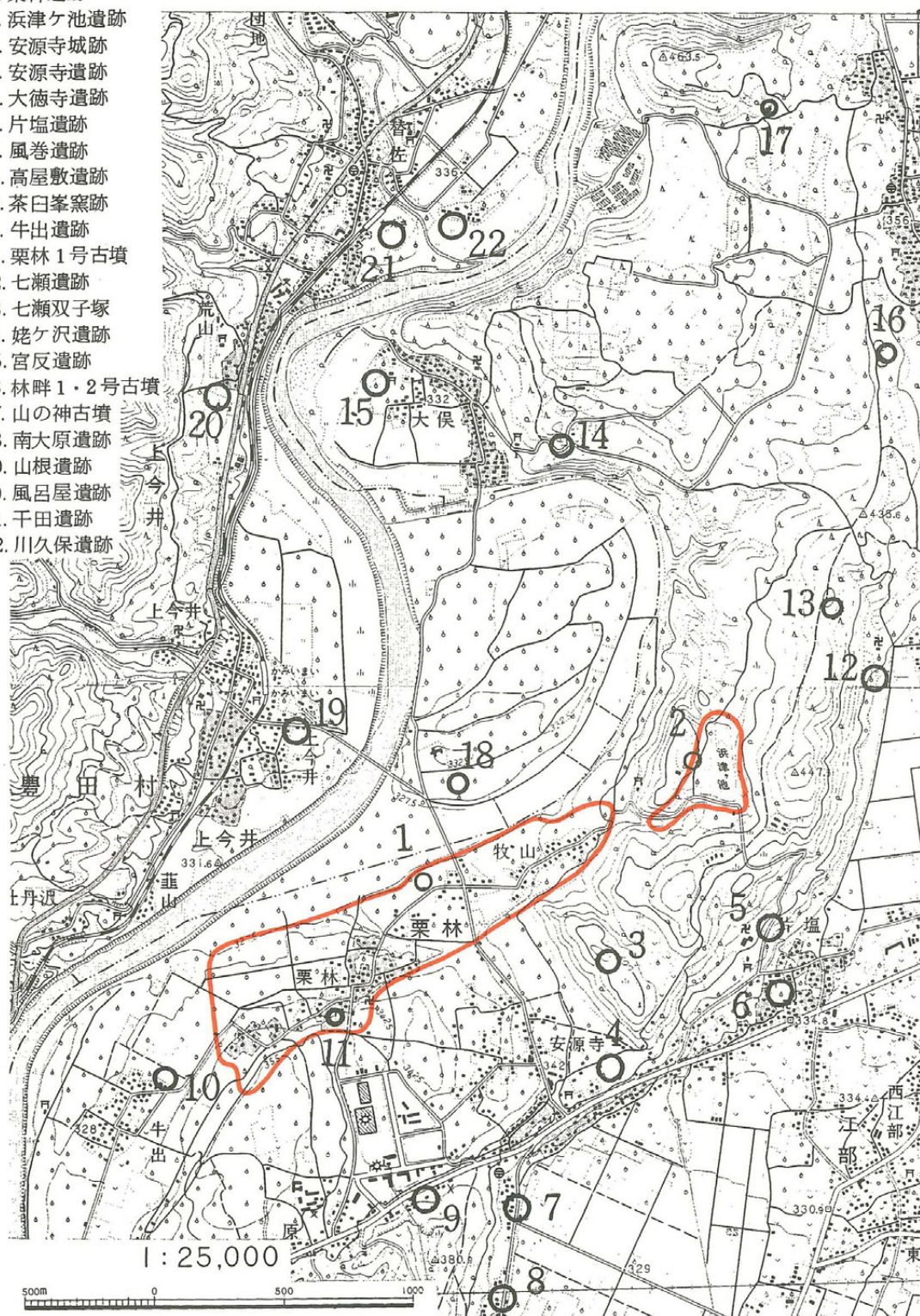
今回の調査は、畑地かんがい事業に伴うもので、前年度当市が実施した安源寺遺跡緊急発掘調査に引きつづき2例目に当たる調査である。前年同様に、地下の遺構・遺物の破壊を最小限にすることを目的に配管掘削範囲のみに調査地区を限定した発掘調査であった。また調査は、一部農作物の生育・収穫時に当たったが、地元支部役員の御協力並びに園地所有者各位の御理解により、トラブルもなく現地調査を終了することができた。

前述したように、調査地区を掘削範囲に限定したため、遺構・遺物の平面的な関連を追求する上で制約が大きく、特に栗林遺跡については幅員30cm、深さ45cmという小規模のものであり、破碎された遺物の検出が中心であり遺構面に及ばない例がほとんどであり、研究者を中心に編成された調査団の内部においても調査中においても調査方法の検討が何度かなされた。

しかし、両遺跡とも予想された遺構との関連をも解明するまでには、至らなかったものの分布調査の意味において、今後の研究資料として活用されるべき報告となるであろうと思われる、またそれを期待するものである。なお、遺物の整理は1月半ばから市民プールにおいておこなわれ、3月末日報告書を発刊した。

(徳竹 雅之)

1. 栗林遺跡
2. 浜津ヶ池遺跡
3. 安源寺城跡
4. 安源寺遺跡
5. 大徳寺遺跡
6. 片塩遺跡
7. 風巻遺跡
8. 高屋敷遺跡
9. 茶臼峯窯跡
10. 牛出遺跡
11. 栗林1号古墳
12. 七瀬遺跡
13. 七瀬双子塚
14. 姥ヶ沢遺跡
15. 宮反遺跡
16. 林畔1・2号古墳
17. 山の神古墳
18. 南大原遺跡
19. 山根遺跡
20. 風呂屋遺跡
21. 千田遺跡
22. 川久保遺跡



第1図 周辺遺跡分布図

調査地周辺の環境

1. 遺跡の立地

栗林遺跡並びに浜津ヶ池遺跡は、両遺跡とも長丘丘陵上に位置している。長丘丘陵は、長丘・高丘地区をほぼ南北に縦走し、その上部を覆う粘土質土によって特徴づけられている。海拔高度は、330m～380mにわたり、洪積世地層を浸食して形成された面で、立ヶ花付近で観察される断層から、地殻変動が近い時代にまで継続していることがうかがえる。

栗林遺跡は、中野市栗林地籍に所在し、標高330m～360m前後の千曲川旧床の河岸段丘上に帯状に分布している。また遺跡南側のやや低地となる部分は、かつては湿地帯あるいは沼地状の地帯であったと推測され、年間降雨量1000mm程度と少量ではあるが、水田地利用として稲作には適した地域であったろうと思われる。

浜津ヶ池は、中野市栗林地籍に所在し、標高380mの丘陵鞍部に立地する。池周約750mを測る現在の浜津ヶ池は窪地に自然に形成された溜池的湿原を貯水池に改修されたものであり、市民の憩いの場所として、ボート遊び・魚つりの好適地として親しまれている。浜津ヶ池の原地形は、現在よりも大部小規模であり、水面も低かったものと思われる。水面下から遺物が検出されるのも、そのためである。

2. 遺跡の歴史的環境

長丘丘陵上には、古くは旧石器時代から現代に至る各時代を通しての人間の営みの痕跡を窺い知るこのできる遺跡が数多く存在している。

今回調査の対象となった栗林遺跡並びに浜津ヶ池遺跡の他に、旧石器時代から近世までの大複合集落跡として知られる安源寺遺跡を始め、多量の縄文式土器と完形の土偶を出させた大俣姥ヶ沢遺跡等、市内でも特に貴重な遺跡が点在している地域でもある。

尚、その分布については、第1図、第1表を参看していただきたい。（徳竹 雅之）

第1表 周辺遺跡表（長野県史より）

中野市

番号	県番号	遺跡名	所在地	立地	遺構・遺物	文献	備考(所蔵者)	調査の有無
1	6559	栗林遺跡	栗林・北原、 梨子ノ木、 松原 ^{ほか}	平地	(弥) 住居跡3、土墳墓3、集石1 中・後期土器、磨石鏃、石 鋸、石庖丁、太型蛤刃石斧、 扁平片刃石斧、石槌、凹石、 細型管玉、勾玉、ガラス玉、 小玉、滑石模造品 (平) 土師器、灰釉陶器、須恵器 (中) 五輪塔、宝篋印塔、 青・白磁器	4.42 43.44 45.46 47.48 49.50 51.52	中野教育委員 会、高丘小学 校、神田加奈 登、京都大学 増田満、石川 秀信 ^{ほか} 『栗林式土器』 北信中期弥生 式土器の標識 遺跡、県史跡	有(昭和23. 25.40.44. 52.54.55. 56.58年)
2	7913	浜津ヶ池遺跡	栗林・大池 平、片塩・ 池端、池南	丘腹	(旧) ナイフ形石器、彫器、搔器、 石刃 (縄) 石鏃、打石斧 (平) 土師器、須恵器	23.53. 54	金井文司	
3	7858	安源寺遺跡	安源寺・城 山	丘上	(中) 土塁、堀、連郭	1.21	伝城主高梨氏 安源寺館跡に 対する山城	
4	6558	安源寺遺跡	安源寺・宮 裏、峯、立 道、清水 ^{ほか}	段丘	(旧) ナイフ形石器、彫器、石刃 (縄) 前中土器、石鏃、石槍、打 石斧、石匙、凹石、磨石斧、 磨石、石皿、敲石、玦状耳 飾、土偶 (弥) 住居址5、土墳墓15 中・後期土器、打石斧、磨石 斧、石庖丁、太型蛤刃石斧、 片扁平片刃石斧、細形管玉、 ガラス玉、土錐、土製紡錘車、 土製勾玉、土製丸玉、鉈 (古) 土師平窯1、トンネル式無 段登窯1、土師器、鉄鏃 (平) 竪穴住居4、土墳12 (中) 火葬墓12、土墳墓1 古銭、鉄釘 (近) 小柄	4.34 35.36 37.38 39.40 41	中野市教育委 員会、高丘小 学校、神田加 奈登、山崎賢 一部(市指定) 高見沢忠男 ^{ほか}	有(昭和26. 41.51.52. 60.61年)
5	6551	大徳寺遺跡	片塩・竹ノ 腰、タテ、 清水	山麓	(弥) 後期土器 (古) 土師器 (平) 土師器		平野小学校 田川幸生	
6	7873	片塩遺跡	片塩・川添、 高屋敷、道 下、寺前	山麓	(平) 住居跡、竈跡、布目瓦を芯 土師器、須恵器	55	金井汲次 岩月達男	有(昭和35 年)
7	9857	風巻遺跡	安源寺・風	段丘	(平) 土師器	4	高見沢信秀	

8	9849	高屋敷遺跡	巻、日向、山根 草間・高屋敷	山麓	(縄) 打石斧 (弥) 炉跡、焼土、中、後期土器、 凹石 (平) 土師器、石組カマド、同溝	25	金井文司 北村学	
9	9854	茶臼峯窯跡	草間・茶臼峯	丘斜面	(奈) トンネル式無段登窯2、須恵器 (平) 半地下式無段登窯5 須恵器	4.30 32	中野市教育委員会	有(昭和38、39、46年)
10	9856	牛出遺跡	牛出・北原	段丘	(縄) 石槍、磨石斧、石皿 (弥) 後期土器、太形蛤刃石斧 (平) 土師器、須恵器	4	鈴木儀一郎 有賀雅男 芋川茂吉	
11	7913	栗林1号古墳	栗林・西原	段丘	(古) 方墳(1辺11m、高2m)	4		
12	6553	七瀬遺跡	七瀬・宮前、 棚畑、屋敷添	山麓	(弥) 後期土器、太形蛤刃石斧 (古) 土師器	4	木村慶明 金井文司 中野市教育委員会	有(昭和58年)
13	7901	七瀬双子塚古墳	七瀬・南原	丘上	(古) 前方後円墳(全長78m、後円径48m、高7.5m、前方幅25m、高6.5m) 竪穴式、円筒埴輪、八乳鋸齒文鏡、直刀、矛、三角板革留、短甲、土師器、須恵器	4.56	七瀬区、大正10年青年団掘る 県指定史跡	
14	6554	姥ヶ沢遺跡	大俣姥沢	段丘	(縄) 住居跡1 前・中土器、打石斧、石鏃、磨石斧、石匙、石錐、石皿 土偶、敲石、玦状耳飾 (弥) 中期土器、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧 (古) 住居跡1 土師器	4 77	中野市教育委員会 長丘小学校 神田加奈登 池田実男 神田禎治	有(昭和57年)
15	7874	宮反遺跡	大俣・宮坂、 東反	段丘	(縄) 住居跡(敷石)1、土壇1 中期土器 (弥) 後期住居跡 後期土器 (平) 鍛冶跡1、住居跡2 土師器、須恵器 墨書土器「金」	4.59 60	中野市教育委員会 神田加奈登 神田禎治	有(昭和58、59年)
16	7905	林畔1号古墳	田麦・林畔	丘上	(古) (径23m、高4m) 合掌型石室 鉄剣5、直刀2、蕨手形鉄器、刀子、鉄鏃50、短甲1、馬具、砥石、ガラス玉、土師	4.13	中野市教育委員会、市指定史跡	

	7906	林畔2号古墳	田麦・林畔	丘上	器、人骨 (古)円墳(径27m、高2.7m) 珠文鏡、管玉6、ガラス小 玉36、勾玉2、碧玉勾玉1、 滑石製小玉224、櫛7、直刀 1、鉄鏃20、刀子1、人骨	4.61 62	京都大学	有(昭和23 年)
17	7907	山の神古墳	厚貝・袖山	丘上	(古)円墳(径32m、高4m) 円筒埴輪、剣6、矛1、刀 子1、異形刀子1、斧頭2、 鏃頭1、槍頭1、滑石製小 玉23、櫛25	4.61 62	京都大学 市指定史跡	有(昭和23 年)

豊田村

県 番 号	番 号	遺 跡 名	所 在 地	立 地	遺 構 ・ 遺 物	文 献	備考(所蔵者)
18	6926 (2)	南大原 "	" 南大原	段 丘	(縄)前期竪穴住居1 有尾式、南大原式、北白川下層Ⅱ式、 上原式、加曾利E式、石鏃、打石斧、 凹石、石皿、磨石斧、石錐、石匙、玦 状耳飾、シカ、イノシシ、クルミ (弥)竪穴住居、溝 栗林式、箱清水式、石鏃、磨石鏃、太 型蛤刃石斧、偏平片刃石斧、細型管玉、 凹石、玉砥石、植物種子 (平)土師器、須恵器 (昭和26.32.54年発掘)	Cb37 " 38 " 52 " 190※ Db57 " 137※	神田加奈登 豊田村教委 神田禎治 神田加奈登
19	6927 (3)	山 根 "	" 山 根	台 地	(縄)中期初頭形式、勝坂式、加曾利E式、 堀ノ内式、佐野式、石鏃、打石斧、磨 石、石皿、磨石斧、石匙、石錐、石鏃、 砥石、石棒 (弥)栗林式、箱清水式、石鏃、太形蛤刃石 斧、偏平片刃石斧、有孔小形石斧 (平)土師器、須恵器	Cb 6	
20	6925 (6)	風呂屋遺跡	" 荒 山	山 麓	(縄)勝坂式、後期土器、石鏃、凹石 (弥)太形蛤刃石斧 (平)灰釉陶器 (中)空堀、土塁		
21	6921 (9)	千 田 "	" 替佐・千田	段 丘	(縄)勝坂式、加曾利E式、石鏃、打石 磨石斧、石鏃 (弥)箱清水式、太形蛤刃石斧、扁平片斧、 刃石斧 (古)土師器		飯山北高校
22	6922 (14)	川久保 "	" " 川久保	"	(弥)百瀬式、太形蛤刃石斧、扁平片刃石 斧	Db13 " 36	

栗 林

第1章 はじめに

第1節 調査日誌

- 11月6日（金） 晴 25-1-11~13・14地区から調査を開始する。また並行して周辺地区の地形測量（ $1/100$ ）を実施する。
- 11月7日（土） 晴 25-1-1・2・3（一部）・7・8・9（一部）・11・14~15, 25-5-9~11地区の調査を開始する。
- 11月9日（月） 晴 25-4-8~14, 25-5-3（一部）・8~9地区の調査を開始する。
- 11月10日（火） 晴 25-4-4~8・11（一部）・14（一部）, 25-5-5（一部）・6・7地区の調査を開始する。
- 11月11日（水） 晴 25-5-1~4, 25-6-2（一部）・3・5~7（一部）・8~10地区の調査を開始する。
- 11月12日（木） 晴のち曇 25-6-1~2（一部）・6~8・10~11地区の調査を開始する。25-6-7より比較的土器の集中する地点を検出清掃し、写真撮影を行う。
- 11月13日（金） 雨のち曇 25-8-1~5・6（一部）・7地区の調査を開始する。先日検出の25-6-7地区出土の遺物を取り上げる。
- 11月15日（日） 曇のち晴 25-8-8（一部）地区の調査を開始する。
- 11月17日（火） 晴 25-8-8~10地区の調査を開始する。
- 11月18日（水） 晴 25-8-10~13, 25-9-2~6地区の調査を開始する。25-8-11より横転した状態で壺（第13図No.20）を検出し、写真撮影記録し取り上げる。
- 11月19日（木） 曇 25-9-1~2・7~12地区の調査を開始する。
- 11月20日（金） 晴 25-9-7（一部）・13~18, 25-10-19地区の調査を開始。
- 11月21日（土） 晴 25-10-1~5・6・7~9地区の調査を開始する。
- 11月24日（火） 曇のち晴 25-10-4（一部）・5（一部）・10~14・15~18地区の調査を開始する。25-10-12より焼土に伴って土器が出土する。25-10-17より炭化物を検出する。
- 11月25日（水） 晴 25-7-7~12, 25-8-5~6, 25-10-18（一部）地区の調査を開始する。

- 11月26日(木) 晴 25-7-1~6・7(一部)・25-5-5(一部)地区の調査を開始する。25-7-12より完形の杯(第12図、No. 4)が出土。
- 11月27日(金) 曇 25-3-6~10・11~15・16地区の調査を開始する。
- 11月28日(土) 曇 25-3-1~5・6(一部)・8~10地区の調査を開始する。25-3-9より土器出土する。
- 11月30日(月) 晴 25-2-1~5・6(一部)地区の調査を開始する。25-2-3より土器出土する。
- 12月 1日(火) 曇のち晴 25-2-6~12地区の調査を開始する。25-2-9より集石遺構を検出する。
- 12月 7日(月) 曇のち晴 25-1-3~6・9~10, 25-2-11(一部)・12地区の調査を開始する。
- 12月 8日(火) 曇 25-4-1~2(一部)・3・4(一部)・12(一部)地区の調査を開始する。
- 12月 9日(水) 曇 25-4-1(一部)・12~15・16(一部)地区の調査を開始。
- 12月11日(金) 曇 25-5-20~21, 25-8-14~16地区の調査を開始する。
- 天候等のため以後調査を断続的に行う —
- 12月26日(土) 晴 25-4-1地点極近の電磁弁工事地区より石戈片が出土。
- 1月12日(火) 晴のち曇 25-9-1から25-9-21につなぐ道路横断部より土器出土。
- 1月19日(火) 雪 随時立ち会い調査を含め現地調査を終了する。(徳竹 雅之)

第2節 層 序

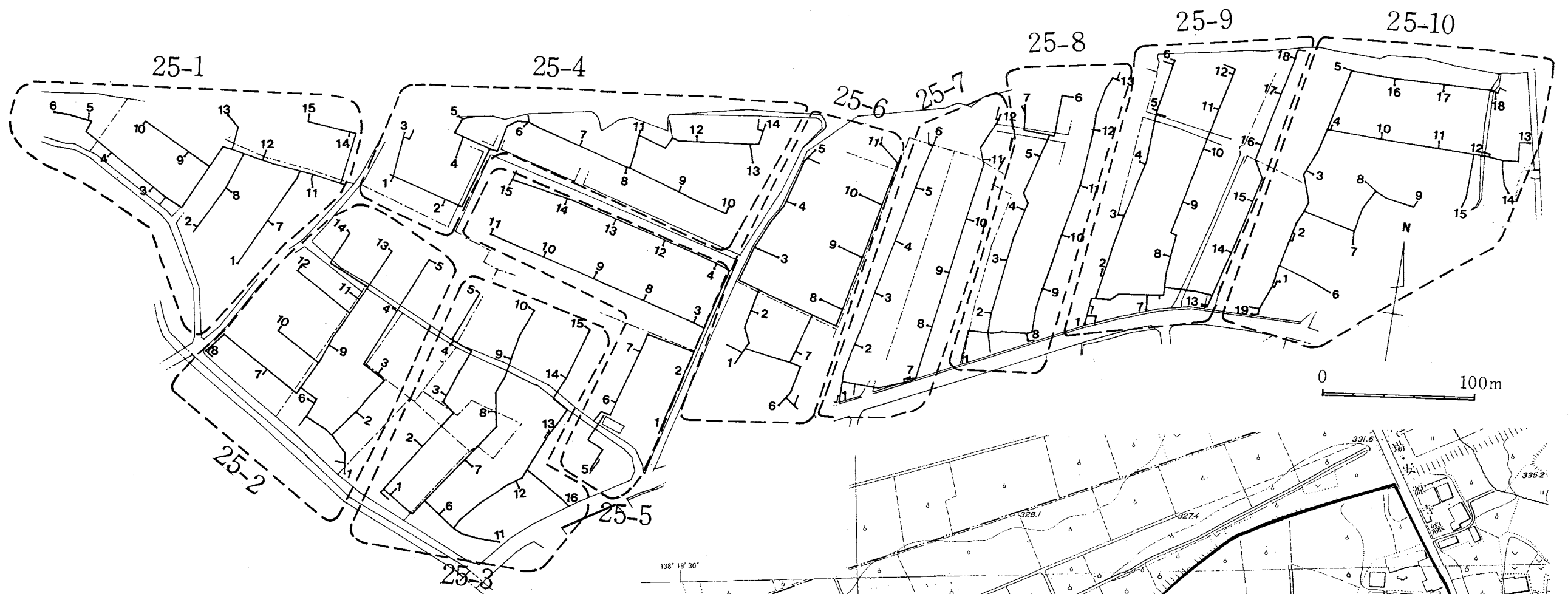
調査地は、南へわずかに傾斜する畑で、現在はリンゴ・アスパラが栽培されている。調査地東端の25-10から西端の25-1までは、約3mの比高をもつ。

土層の堆積層序は、上から第Ⅰ層耕作土、第Ⅱ層黒褐色土、第Ⅲ層ローム層とつづいている。第Ⅰ層は、千曲川の氾濫による泥と細砂の堆積がみられ、茶褐色を呈している。厚さは10~30cmをはかる。第Ⅱ層は遺物包含層である。緻密な砂質土層で、やや粘土質性である。20~30cmの厚さをもつが、場所によっては40cmをこえる厚さをもつところもある。弥生時代を通じて長期間にわたって形成されたものと思われる。(第3図)

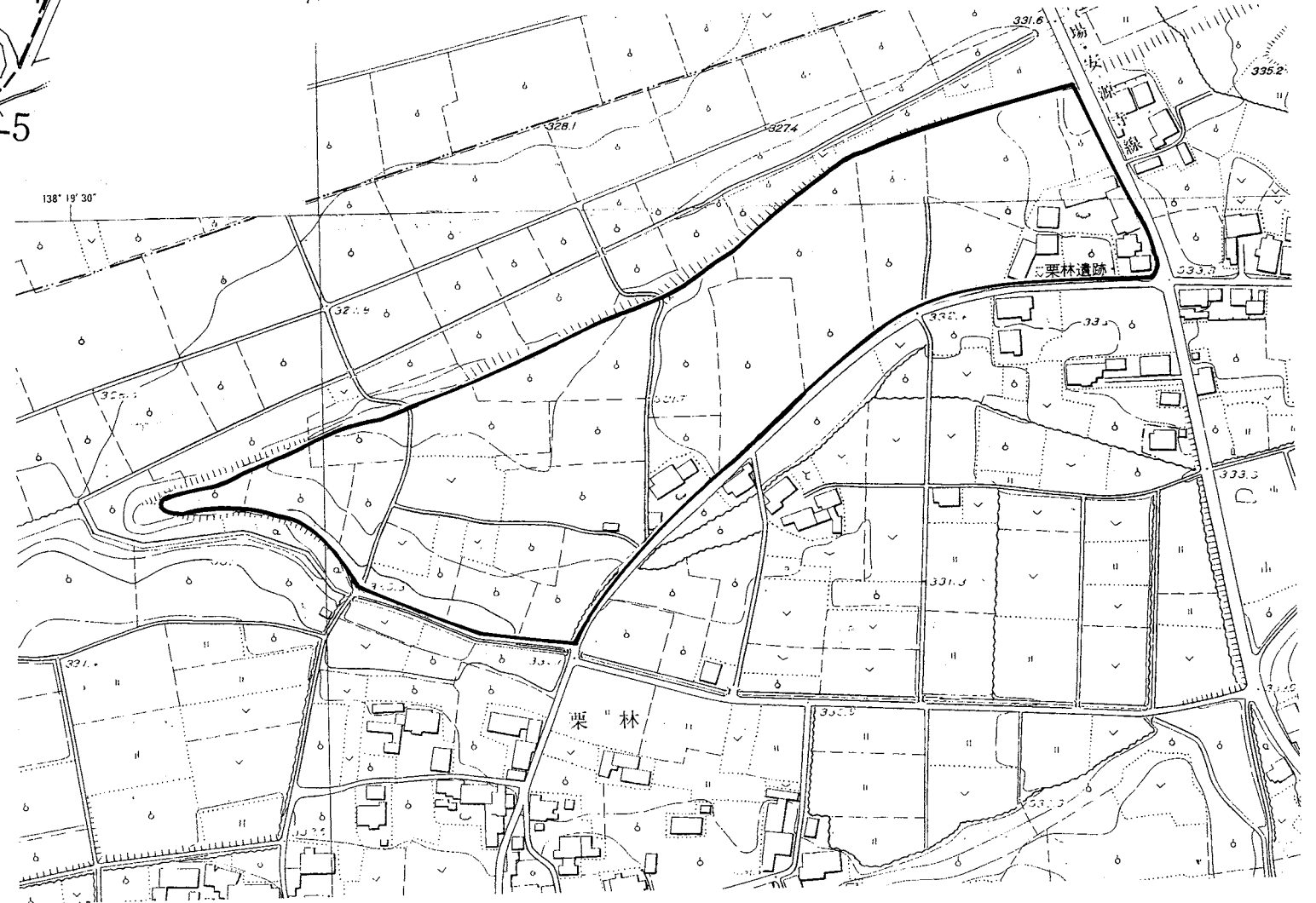
今回の土層も、数次にわたっておこなわれた調査とはほぼ同様で、層序は原初の平行な層位を保っている。栗林の土質は、保水力が強くしたがって水はけが悪く、湿潤である。しかし、乾燥すると硬化する性質をもっている。

なお、第3図に示した図は、作業工程図で、5は予定図であったが、遺跡保護のため6の図のように変更された。

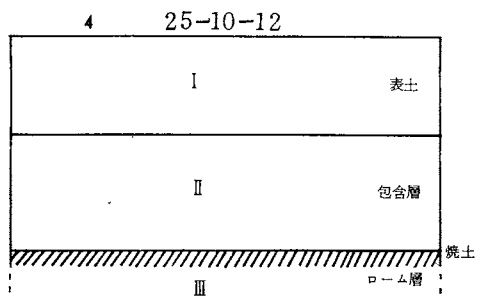
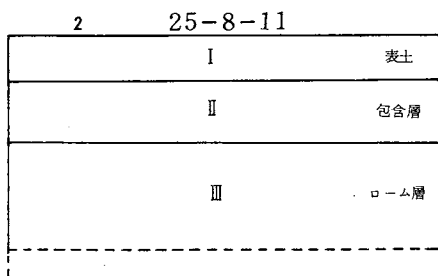
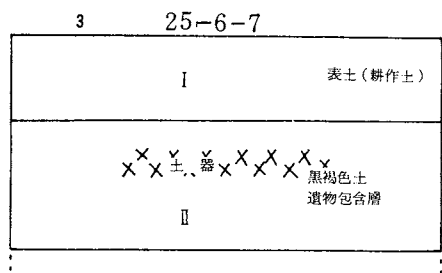
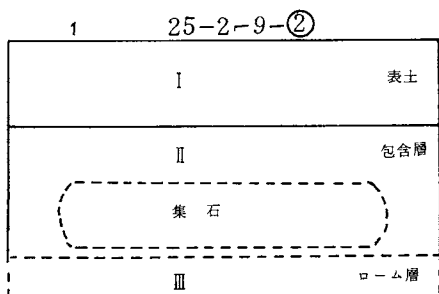
(池田 実男)



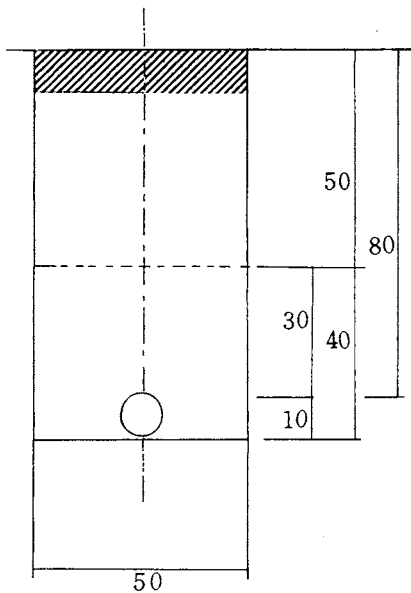
第2図-1 調査坑設定図



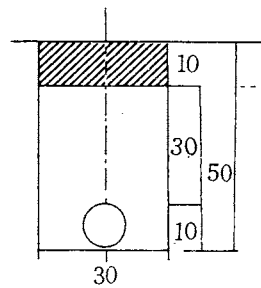
第2図-2 調査地全体図



5 掘削工事計画模式図



6 掘削工事施行模式図



第3図 土層模式図

第3節 研究史概説

栗林遺跡は「栗林式土器」の標識遺跡として早くから知られ、学史的にも著名である。大正11（1922）年の『下高井郡誌』には、当地方の考古資料が初めて掲載され、栗林からは石斧や石鏃の出土が記録されている。

栗林遺跡が学会から注目されたのは、昭和6（1931）年、神田五六氏が、瓦原料粘土採取場で、特異な土器を発見されたことに始まる。この土器は、磨消縄文に華麗な模様のある土器で、神田氏はその後も土器の収集・紹介に努められた。⁽¹⁾⁽²⁾

八幡一郎・森本六爾・藤森栄一氏らも、この土器に注目され、現地を訪れて様々な論考を発表された。昭和11（1936）年、藤森氏は遠賀川系弥生式土器の影響下にある信濃古式弥生式土器ととらえ、栗林式土器として型式設定された。⁽³⁾昭和14（1939）年、小林行雄氏は、栗林式土器を中部高地第一様式と位置づけられたのである。⁽⁴⁾しかし、このような戦前の論考は、表面採集によって得られた資料によるもので、発掘調査の機会は戦後まで待たなければならなかった。

栗林遺跡に初めて学術的な発掘調査がおこなわれたのは、戦後まもない昭和23（1948）年秋のことである。この調査は戦後の県下における考古学研究の先駆となった。当時、奈良国立博物館の小野勝年氏、京都大学考古学教室の坪井清足・横山浩一氏が担当された。調査地は遺跡の中心部から、やや西側で住居址2、集石状遺構を検出し、多量の土器、玉製品が出土した。⁽⁵⁾坪井氏は、この調査の成果から栗林式土器を一類、二類に分類された。⁽⁶⁾

第2次調査は、昭和25（1950）年に私設道路の敷設に先立ち、再び小野氏の指導により高丘小、中学校の教職員、児童、生徒によって実施された。小堅穴4基を検出し、このうちの1基からは、栗林式土器がセットで検出されている。⁽⁷⁾

昭和35（1960）年には、県下の重要遺跡として県史跡に指定され、その保存がはかられることとなった。昭和40（1965）年には、遺跡の東端が開田工事にかかり、第3次調査がおこなわれた。⁽⁸⁾この調査では、住居址・小堅穴各1基が検出されたが、土器片の量は僅かであった。昭和54（1979）年には、かんがい施設が設けられることとなり、そこで遺跡を保護するため、栗林・牧山両集落の広範にわたり分布調査が実施されている。⁽⁹⁾その後も住宅の新改築にともない、昭和55（1980）年から翌年にかけて第4・5・6次、58（1983）年には第7次調査がおこなわれた。

さて、栗林式土器をめぐる編年研究は、昭和30年代から活発となった。昭和30（1955）年に藤森氏⁽¹²⁾、永峰光一氏⁽¹³⁾によって、栗林式土器は弥生時代中期中葉以降に位置づけられた。藤森氏は第1次調査の資料により、永峰氏は神田氏報告の2類土器をもって論じられたので、栗林式土器の形式概念は2説に分かれていた。

昭和38(1963)年、桐原健氏は第2次調査の出土資料を中心に、壺の文様の集約化・簡略化傾向に着目され、栗林式土器を中期終末期の百瀬式(松本平)に先行させた。⁽¹⁴⁾また、昭和43(1968)年には、岡谷市海戸遺跡第一次調査の成果から、従来百瀬式土器とされていたものを天王垣外式、海戸式に分離させ、⁽¹⁵⁾百瀬式土器もⅠ・Ⅱ式に細分された。⁽¹⁶⁾さらに同年のシンポジウム「弥生文化の東漸とその発展」⁽¹⁷⁾では、これら一連の論考に加え、中信の編年観に栗林式土器を対応させ、栗林式をⅠ・Ⅱ・Ⅲ式に細分されたのである。桐原氏による栗林Ⅰ式は、縄文を地文とするヘラ描文が頸～胴部にわたる壺。栗林Ⅱ式は、頸部に文様が集中し、胴部に文様がみられない壺。栗林Ⅲ式は、翼状口縁をもつ壺とされた。そして栗林Ⅱ式を天王垣外式・百瀬Ⅰ式に、栗林Ⅲ式を海戸・百瀬Ⅱ式と併行させ、栗林Ⅰ式をこれらに先行するものという編年案を作成されたのである。

昭和46(1971)年、笹沢浩氏は新たな資料によって、桐原氏編年に再検討を加え、⁽¹⁸⁾新たな分類の基準・編年案を発表された。笹沢氏は、栗林Ⅰ式に桐原氏の「栗林式土器の再検討」の中の第二類(ヘラによる大型沈線と地文となる縄文で頸部～胴部最大部に加飾)と第三類(太型沈線と縄文の地に櫛歯状工具による平行線文・半截竹管工具による半月形刺突文、突帯が加わる)をあてられた。栗林Ⅱ式には、縄文を地文とするヘラ描文が頸～胴部に施されるが胴部上位か、下位のいずれかの文様を欠く細頸壺、翼状口縁をもつ壺とされた。さらに、文様が頸部のみに集中する細頸壺、翼状口縁をもつ壺、内湾する口縁部をもつ壺を百瀬式、百瀬併行式とし、栗林Ⅱ式に継続させたのである。昭和51(1976)年、笹沢氏は長野市平柴平遺跡の一括資料を用い、栗林Ⅰ式に平柴平遺跡SKY05、栗林Ⅱ式に平柴平遺跡SBY04、百瀬式併行土器に旭幼稚園遺跡の出土資料をあてられた。壺の文様の集約化・簡略化傾向から、千曲川水系の中期後半の弥生土器の変遷を明らかにされた。昭和52(1977)年、笹沢氏は県内の弥生土器を天竜川流域・千曲川流域の二大別に編年大綱を発表された。この中で、中期後半の土器を、北信、東信・松本平をほぼ、同一の土器分布圏としてまとめ、栗林Ⅰ→栗林Ⅱ→百瀬という大きな流れのあることを示された。

その後10年ほど、笹沢氏編年は定着した感があったが、県内各地で大規模な発掘が相次ぎ、得られた資料によって、笹沢氏編年に対して疑問が出され始めた。昭和61(1986)年、山下誠一氏は飯田市恒川遺跡の調査から⁽¹⁹⁾、下伊那の中期後半の過程を北原Ⅰ式→北原Ⅱ式→恒川式ととらえた。また櫛描文をもつ甕を比較し、北原Ⅰ式=天王垣外式=+=栗林Ⅰ、北原Ⅱ式=海戸=百瀬=栗林Ⅱと併行させ、千曲川水系に百瀬式定立に疑問を示されたのである。同年の三県シンポジウム「東日本における中期後半の弥生土器」⁽²⁰⁾において、設楽博巳・千野浩・小山岳夫氏からも同じような疑問の声があげられた。また、小山氏は昭和60(1985)年から翌年にかけて、90棟もの住居址が確認された佐久市北西ノ久保の出土資料を北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ式に分けられた。そして、北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ式は大方、栗林Ⅱ式と併行されるとし、さらに栗林Ⅱ式の時間的な流れは峻別できるものではなく、古相・中相・新相として漸次的

な様相変化として捉えるべきだとされた。⁽²¹⁾

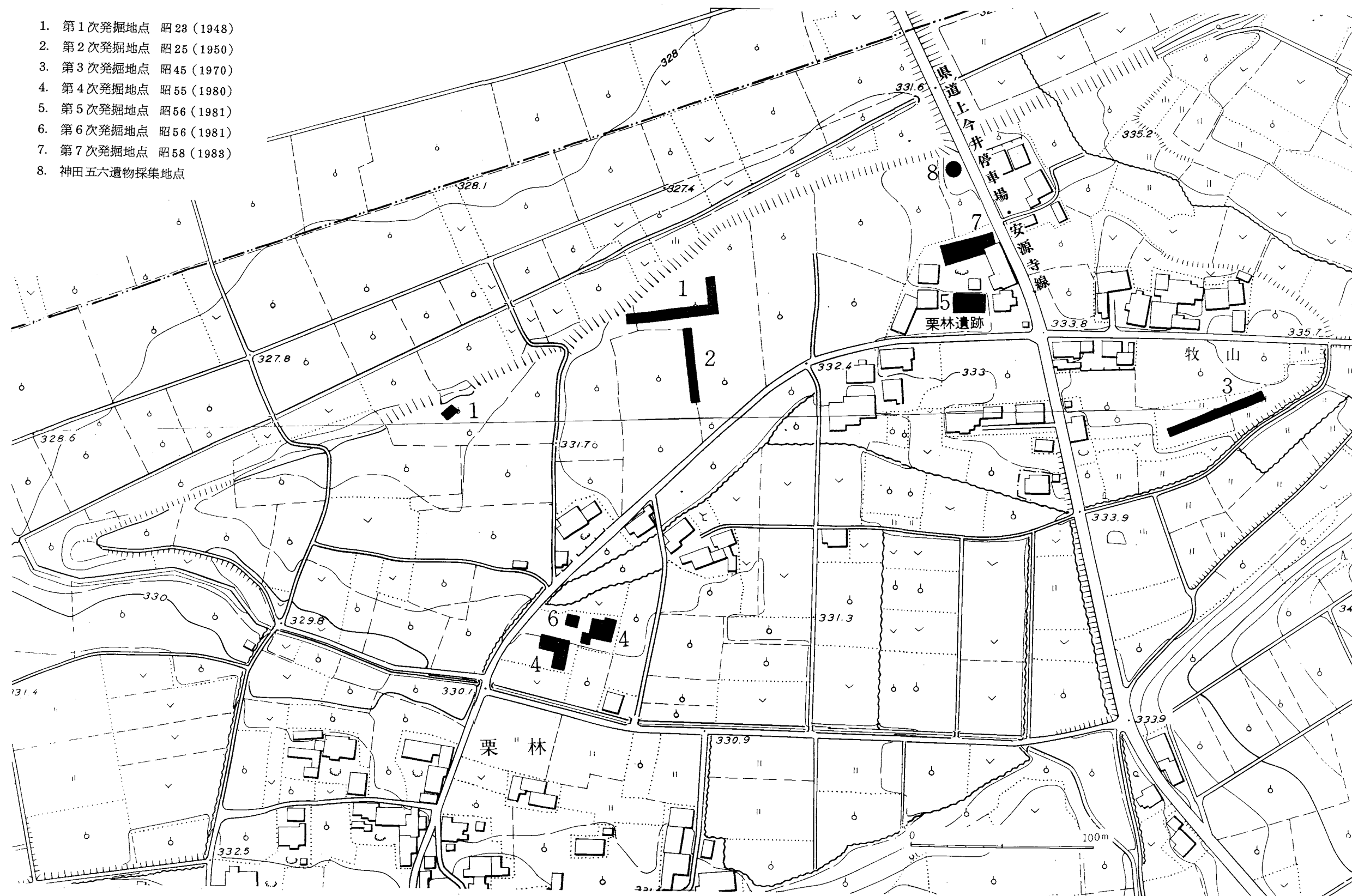
このように、千曲川水系の弥生中期後半の土器編年の混乱・停滞は一括資料に恵まれなかったことにもよる。7次にわたって実施された栗林遺跡の調査も前半がトレンチ方式、後半が住宅の増改築に伴う小規模な調査で、良好な一括資料には恵まれなかった。しかし、笹沢氏編年の栗林Ⅰ式～栗林Ⅱ式（古）（新）の流れは、ほぼ確立され現在に至っている。

（酒井 健二）

文 献

- (1) 神田五六 「信濃栗林の弥生式石器」『考古学』6-10 昭10 (1935)
- (2) 神田五六 「北信栗林の弥生式土器」『考古学』7-7 昭11 (1936)
- (3) 藤森栄一 「信濃の弥生式土器と弥生式石器」『考古学』7-7 昭11 (1936)
- (4) 森本六爾・小林行雄 「弥生式土器 成図録」 昭14 (1939)
- (5) 小野勝年 『長野県下高井郡高丘村栗林遺跡調査報告書』 昭23 (1948)
- (6) 坪井清足 「高丘村弥生式遺跡調査」『下高井』 昭28 (1953)
- (7) 高丘小・中学校『第2次栗林遺跡発掘』 昭25 (1950)
- (8) 林茂樹・金井汲次・桐原健 「長野県中野市栗林遺跡第3次発掘調査概報」『信濃』Ⅲ18-4 昭41 (1966)
- (9) 中野市教育委員会 『栗林遺跡確認緊急調査報告』 昭55 (1980)
- (10) 中野市教育委員会 「栗林遺跡第4次発掘調査」『高井』56号 昭56 (1981)
- (11) 中野市教育委員会 「栗林遺跡第5・6次発掘調査」『高井』64号 昭58 (1983)
- (12) 藤森栄一 『日本考古学講座』4 (中部高地・北陸) 昭30 (1955)
- (13) 永峯光一 「信濃の中期弥生式土器—栗林式土器」『信濃考古綜覧』 昭31 (1956)
- (14) 桐原健 「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49-3 昭38 (1963)
- (15) 岡谷市教育委員会 『海戸遺跡第1次発掘調査』 昭42 (1967)
- (16) 岡谷市教育委員会 『海戸遺跡第2次発掘調査』 昭43 (1968)
- (17) 長野県考古学会 「シンポジウム弥生文化の東漸とその発表」『長野県考古学会誌』5 昭43 (1968)
- (18) 笹沢浩 「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』Ⅲ23-12 昭46 (1971)
- (19) 飯田市教育委員会 『恒川遺跡群』 昭61 (1986)
- (20) 千曲川水系古代文化研究所他 『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の 弥生土器』 昭61 (1986)
- (21) 佐久市教育委員会 『北西の久保』 昭62 (1987)

1. 第1次発掘地点 昭23(1948)
2. 第2次発掘地点 昭25(1950)
3. 第3次発掘地点 昭45(1970)
4. 第4次発掘地点 昭55(1980)
5. 第5次発掘地点 昭56(1981)
6. 第6次発掘地点 昭56(1981)
7. 第7次発掘地点 昭58(1988)
8. 神田五六遺物採集地点



第4図 栗林遺跡従前調査位置図

第2表 発掘調査史一覧表

次	年	担当者・指導者	遺構・遺物	文献
1	昭和23年 (1948)	小野 勝年 坪井 清足 横山 浩一	住居址2、小竪穴 敷石状遺構、矩形石積遺構、 栗林式土器、土師器、紡錘車 磨製石斧、石包丁、打製石鏃、凹石、石皿、 管玉、勾玉、丸玉	『下高井』昭和28年 『長野県下高井郡高丘村 栗林遺蹟調査略報告』 昭和23年(1948)
2	昭和25年 (1950)	小林 義暉 小野 勝年 神田 五六	竪穴、敷石址、ピット 栗林式土器、弥生式土器(前期・中期) 須恵器、注口土器 打製石器、磨製石斧、甑、石包丁、石鏃、凹石	『第2次栗林遺跡発掘』 昭和25年(1950)
3	昭和45年 (1970)	林 茂樹 金井 汲次 桐原 健	住居址1、ピット、溝状遺構 栗林式土器、土師器 釘状鉄器	「長野県、中野市栗林遺 跡第3次調査概報」 『信濃』Ⅲ 18-4 昭和41年(1966)
	昭和54年 (1979)	金井 汲次	栗林遺跡確認緊急調査	栗林遺跡確認緊急調査報 告書 昭和55年(1980)
4	昭和55年 (1980)	金井 汲次	ピット、溝状遺構 栗林式土器、土師器、須恵器、灰釉 窯滓 鉄片、鉄滓 石斧、石包丁、石槌、砥石、かなとこ石、火打 石、碧玉、管玉、勾玉、丸玉	「栗林遺跡第4次発掘調 査」 『高井』56号 昭和56年(1981)
5	昭和56年 (1981)	檀原 長則 池田 実男 関 孝一 田川 幸生 郷道 哲章	井戸状遺構 栗林Ⅰ式土器、栗林Ⅱ式土器、箱清水式土器 百瀬式併行土器 凹石、石鏃、砥石、石錘、石斧	「栗林遺跡第5・6次 発掘調査」 『高井』64号 昭和58年(1983)
6	昭和56年 (1981)	檀原 長則 池田 実男	ピット 栗林Ⅰ式土器、栗林Ⅱ式土器、箱清水式土器 須恵器、灰釉、青磁 軽石、砥石、	「栗林遺跡第5・6次 発掘調査」 『高井』64号 昭和58年(1983)
7	昭和58年 (1983)	金井 汲次	土壌墓 栗林Ⅱ式土器 管玉	

第2章 遺構と遺物

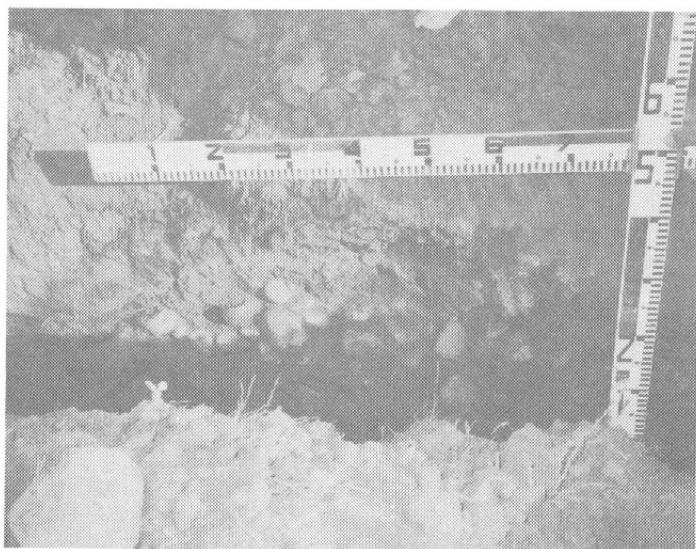
第1節 遺 構

当該遺跡範囲内における畑地かんがい事業が、計画された時点において事業主体者との何度かの協議を重ね、今回までに実施された何回かの発掘調査において当遺跡内における遺物・遺構の検出される文化層が、平均40cm前後に存在することから40cmを限度として、配管工事の施行を検討したが、農作業時における大型耕うん機等の導入により、耕作等において送水管の欠損の危険性が高く、冬季間に凍結障害の可能性も生ずることから最低、掘削工事並びに発掘調査によって、遺跡の破壊が最小限度に止まることを目的として、掘削幅を30cm、掘削深を45cmとすることに決定した。

以上の遺跡の保護を第1に考慮した変則的な発掘調査のため、明確な遺構の平面プランの検出は皆無であった。

しかし、2、3の特記すべき、検出地区の観察事項及び1～10の小地区割内での出土遺物の検出状態から分布調査的考察を以下に記入する。

まず25-2-9地点より検出された集石遺構は、調査溝を北から南へやや斜に横断する状態（第5図）で検出された。先述した制約のためその規模及び性格についての詳細は不明ではあるが、拳大程度の扁平な河原石が特に規則性を持たない状態で耕作土下からローム層の上面に、1ヶ所は幅30cm、もう1ヶ所は幅60cmの規模で検出された。両者とも、伴出した遺物は一点もなく、時代を比定する事はできない。



第5図 22-9 遺構写真

25-6-7地点（第6図）は、今回の調査地区内において、小規模ではあるがある程度のまとまりを持った状態で土器が検出された唯一の地点である。調査溝の西壁面に検出された

もので、東壁面には痕跡がなく、検出部より西方向へ展開する遺構と思われる。出土遺物は、ほとんどが、栗林式土器であった。

なお、何らかの遺構に伴出するものであらうと思われるが、検出面が掘削深直上であるため、拡張してのより詳細な調査は現時点では、断念せざるを得なかった。

25-10-12地点の遺構は、ローム層上面よりローム層に食い込む状態で焼土層が検出された。若干の土器片も伴出



第6図 25-6-7 遺構写真

されたが、栗林式土器に比定されるものがほとんどであった。地床炉的性格を持つものであらうかと推定される。

以上の中でも遺構の存在を確認すべき顕著な根拠を有する地点の他に、確定はできないものの、かすかではあるが、出土遺物の検出状態や層序の変化等より地下の遺構の存在を推測される地点が数地点あるので、その地点を列記すると、25-2-5, 25-3-9, 25-7-12, 25-8-11, 25-10-15の各地点である。また伴出する遺物は、栗林式土器に比定されるものがほとんどであった。

遺物の出土量をブロック毎に分布的にとらえた場合、25-1ブロック $\frac{1}{5}$ 袋(30cm×20cm) 25-2ブロック $2\frac{1}{2}$ 袋, 25-7ブロック $1\frac{1}{2}$ 袋, 25-4ブロック $1\frac{1}{2}$ 袋, 25-5ブロック $1\frac{1}{2}$ 袋, 25-6ブロック4袋, 25-7ブロック $9\frac{1}{2}$ 袋, 25-8ブロック $2\frac{1}{2}$ 袋, 25-9ブロック $2\frac{1}{2}$ 袋, 25-10ブロック2袋という散布状態を示す。平均2袋程度の出土量に比して25-6ブロック, 25-7ブロックについて特にその量は特異であり、地下に何らかの遺構の存在を推定するには十分な資料といえよう。

以上のように、今回の調査によって検出された遺構について、明確な成果は得られなかったが、それは変則的な調査方法に起因する所がすべてであらうと思われる。しかし、遺跡の保護を第1に考慮した今回の調査方法の善悪については、今後十分な検討が必要であると考ええる。

(徳竹 雅之)

第2節 遺物

1. 栗林遺跡の編年代

縄文時代から弥生時代への転換は、どのようになされたのであろうか、古くて新しい命題である。近年、山形、秋田、青森県下に遠賀川系土器が、発見され、東北地方の弥生時代の幕あけが、弥生前期、畿内第1様式の中段階の頃始まっていた（伊藤信雄・「東北地方における稲作農耕の成立」1985）とされるようになった。これらの弥生文化は、日本海沿いに伝播したとされており、稲作の気象条件は、日本海方面が現在も有利である。

では、栗林遺跡の弥生文化は、どのような位置におかれているのであろうか、佐原真⁽¹⁾（1966）によれば「日本列島」における水田稲作農耕の普及発達は、後代における沖縄・北海道のそれを除外すれば次に上げる4あるいは5つの段階を経て実現したものと考えられる。

- 1 縄文後期～晩期九州？
- 2 弥生早期 山の寺・夜臼段階 九州～近畿
- 3 弥生前期 （古・中・新） 遠賀川段階 九州～奥丹後半島／名古屋
- 4 弥生前期 （中）・砂沢段階（？） 山形・秋田・青森・（宮城）・（岩手）
- 5 弥生前期 （中）～弥生中期（ ） 永禰平・岩滑段階・長野・群馬・茨城・福島・宮城とされて、中部山岳地帯の弥生時代の開始が、他の地方より遅れて始まったと、示唆されている。

北信の縄文晩期の編年は（大洞C₁式）＝佐野Ⅰ式→（大洞C₂式）＝佐野Ⅱ式→（大洞A式）＝氷Ⅰ式→（大洞A式）＝氷Ⅱ式とされ、紅村⁽²⁾（1987）は、「長野県では、氷Ⅱ・針塚・林里・刈谷原等いろいろな表現をとっているが、愛知県に於ける西志賀式にほぼ平行するステージと考えて良いであろう」とされ、茅野市御社宮司遺跡において「それまでの研磨美麗な浮線文土器の使用から、一転して荒々しい条痕系土器（東海地方は、檜王式・水神平・岩滑式土器など）を主体として受け入れた。その時点こそ長野県における新時代の開始、すなわち弥生時代の開始と解釈すべきであろう」とされている。Ⅱ期は長野市松節、新諏訪町、岡谷市庄之畑で飯田市阿島遺跡の壺にみられる壺の文様が、松節遺跡出土品にも多用されており、昭和60年の調査で、栗林Ⅰ式の前段階を考えるに好資料の21号木棺墓一括出土器などがみられる。

氷Ⅱ式での篋描文、縄文施文の退嬰から、松節段階から、縄文晩期に時代の逆行の現象がみられ、縄文・篋描文で多彩に器面を飾っている。これらは、中部山地の複雑な動きを反映したもので、関東地方などでは、古式土師器まで縄文施文が残る。この松節段階の篋描文・縄文施文の傾向は、栗林Ⅰ式土器に継承される。この様に弥生中期の変遷は、現在、善光寺平南部地方が、資料が豊富でスムーズにたどれる。

栗林Ⅰ式土器は、笹沢（1971）によって長野市平柴平遺跡5号土壇一括出土器を指標としており、篋描文とともに櫛描文が多彩された土器で、畿内第Ⅲ様式の影響下で、成立した形式と考えることができる。地理的環境から該期の櫛描文の多用される、北陸の小松式（細い櫛描文）の影響も考慮しなくてはならない。この様に櫛歯状工具による施文は、弥生後期の箱清水式土器まで継承されている。栗林Ⅱ式土器は、栗林遺跡第1次調査のD地点出土土器などを標識としており、壺の文様の集約化、簡略化の傾向にある。次の箱清水式に属する土器も遺跡全体には、部分的にみられるが、今回の調査では、少量であった。次には、平安時代の国分期に属する住居址が散見してみられる。これには、甕形土器、埴形土器や、灰釉、地元産の須恵器を伴っており、中世では、第4次調査の灰釉陶器、珠州焼播鉢、鉄滓など、第7次調査の青磁片などで、現代までの一大複合遺跡と考えられている。

文 献

- (1) 佐原 真 「縄文～弥生」日本考古学協会 昭和61年度大会 講演要旨 昭61（1986）
- (2) 紅村 弘 『西日本・中部日本における弥生時代成立論』 昭和62（1987）

縄文時代晩期～弥生時代の編年（案）

参考 石川1986、笹沢1987

地方 年代	東 海 西 部		北 陸	中 部 高 地			関 東		東 北
	尾張(低地)	三 河	石 川	南 信	中 信	北 信	南 部	北西部	
縄 文 時 代	晩期					佐野Ⅰ 佐野Ⅱ 水Ⅰ			大洞B " BC " C1 " C2 " A
	五貫森 馬見塚		柴山出村			水Ⅱ			" A'
弥 生 時 代	前期	貝殻山 西志賀	(樞王) 水神平		林 里 (大成林)	(こぶし畑)	新諏訪町	(堂 山) (平沢北開戸)	(前 組) (上敷面)
	中期	朝 日 (古) 篠東 貝田町(中) 瓜郷 (新)	(資場N-5) 小松(古) (中) 阿 島 (新)	寺 所 + 北 原	恒 川 + 百 瀬	栗林Ⅰ 栗林Ⅱ +	(松 節) (中 里) 宮 台 (古) 竜見町 (中) 竜見町 (新)		
	後期	高 蔵	戸 水	座光寺原 中 島		吉 田 箱 清 水			

第3表 編 年 表

2. 栗林式土器の分布圏

栗林式土器は、長野県北部千曲川流域に分布の主体をもつ弥生中期後半に位置づけられる型式で、その分布圏は、第7回三県シンポジウム、『東日本における中期後半の弥生土器』（1986）によれば、新潟県は信濃川流域、魚野川流域の魚沼地方、西は、糸魚川市、東は、阿賀野以北の山草荷遺跡までとされ、従来の百瀬式に含まれるものあり、魚沼地方では、北陸の櫛描文系土器は、ほとんど見られないとされている。群馬県の竜見町式土器は、杉原によって信濃栗林式土器と同系統か、末期的なものとされ、栗林式土器と百瀬式と強い関連性を示すとされ、北信地方に近い西毛地域の吾妻川、鳥川、碓氷川、鎭川流域に分布が、知られている。

埼玉県では、秩父市大沼遺跡、美里町神明ヶ谷戸遺跡、熊谷市平戸遺跡、寄居町用土・平遺跡などが知られ、栗林Ⅰ式～Ⅱ式期に対応される。器形・文様構成のものが、検出されている。この外、客体としては、東京・神奈川県にもみられ、石川県にもみられるという。県内では、善光寺平南部地方を中心として、千曲川を遡上するに従って古い段階の資料が少なくなる、これは、群馬県方面も同傾向にある。南信には、北原式土器に客体としてみられ、天竜川水系では、愛知県朝日遺跡でも検出されたといわれ、後の箱清水文化圏とともに比較的大きな文化圏を形成しており、栗林Ⅰ式期の成立には、畿内地方から、強い影響が作用していると思われるが、この点の究明は、今後の調査・研究の成果に俟つ処が大きい。

3. 栗林式土器の分類

今回の調査による資料の提示を補完するため、引用する資料は次の通りである。

- 神田五六 「北信濃栗林の弥生式土器」『考古学』7-7（1936）略記（神田図版番号）
坪井清足 「高丘村弥生式遺跡調査」『下高井』（1953） 略記（坪井図版番号）
桐原 健 「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49-3（1963）略記（桐原図版番号）

（1） 器形の分類

壺 赤彩されたものと無彩のものがある。大型品と小型品がある。口縁に相対して小突起が附せられ、蓋用の紐穴が穿孔されたものがある。（第14図6）

器形によって分類する。

壺 A 細い頭部にラップ状に外反する口縁部をもつ。「単純口純・細頸壺」（第14図7・8, 13図16, 神田3・4・5・6・7, 坪井1・2）

壺 B 細頸壺で受口状の口縁を有し形態は、段状の稜をもつ（第14図1・99, 桐原50）であり、後者は口縁形の広狭がある。円味をもつもの（第14図6・10, 桐原51）がある。

- 壺 C 太い頸部で、受口状の口縁形態 (神田28・29)
- 壺 D 袋状に内湾する口縁形態の壺 (坪井5)
- 壺 E 赤色塗彩された壺、口縁部に小突起をもつ (第13図17) と頸部に接合のクビレを有するもの (第13図15) がある。
- 無頸壺 口縁に2孔を有するものがある。(神田39)
- 注口壺 小形壺で、腹部最大径上に注口を有するものがある。(坪井4)
-
- 甕 A 口縁が単純に外反する器形 (第12図5・12, 17図74, 78, 90, 第18図112, 118, 神田38, 42, 43, 桐原54, 56~58, 坪井8)
- 甕 B 受口状の口縁を有する甕、(神田24~26, 35~37)
- 台付甕 台部の形態は底部を厚くした原初的な形態 (第12図13) から、脚部が短いもの (第12図7・8) 発達したもの (坪井9) などがある。口縁部の形態により
- A 単純口縁の甕
- B 受口状の口縁の甕
-
- 鉢 塗彩されたもの (第17図80, 81, 13図18) と、されないものがある。また小突起などで装飾されるもの (第16図71~73, 神田41, 坪井13) がある。形態により細別する。
- A 碗状、逆「八」字状を呈し、直口縁で小突起が1~2連みられる。無彩 (第12図2, 神田41, 坪井11, 13) ・黒色磨研 (第12図1) 赤色塗彩 (第16図71~73) がある。
- B 碗状の体部から口縁部が屈折して、面を作っているもの、塗彩されている。(第12図4)
- C 折り返し状口縁をもつ大形品で、赤色塗彩されたもの (第17図80, 81)
- D 口縁部が大きく「く」字状に外反するもの (神田40)
-
- 高坏 類品は少ない、赤色塗彩され、無彩のものもあると思われる。但し(第12図3)は、器形から箱清水期のものと推定される。
- A 坏部が碗状を呈し脚部が発達しないもの。(第12図11)
- B 坏部は不明だが、脚部が発達せず、脚部と坏部の間に突帯のめぐるもの (第12図10)
- C 坏部が碗状で口縁部が、鐙状を呈するもの、未確認である。
-
- 甗 A 碗形を呈し口縁部がやや内湾する器形で、無彩である。(少破片で図示なし、坪井10, 桐原98)

蓋 表面に文様がみられ、2孔1対をなす、塗彩A（第16図69）と、無塗彩Bがある。
（神田16，桐原97）

手づくね形土器2形態を有する A）小形の碗形の手づくね品とB）（第16図70）の如く或る種の器形を模したと思われる。小形土器

（2） 文様・技法上の分類

栗林I式（古）期

櫛描文の定着前と考えられる土器で、今回の調査では、重木の葉連繫文とした（第16図67）壺の文様などがあり、類似のものは、神田22，23，桐原49などがみられるが、破片資料のため不安定である。かつて八幡氏によって紹介されて著名な荒山出土⁽¹⁾とされる、壺などもこの類に含められるが、量的には少なく、良好な出土例はまだない。破片資料でも良い点といえ、器面の観察が、表裏に亘って詳細にできることである。晩期の縄文土器の如く砂粒が少なく内外、平滑にきれいに研磨された土器と、栗林式以後の砂粒が多く、刷毛目整形され赤褐色系に焼かれた土器を見ると、この辺に、整形技法が2分される要素があるように思われる。この砂粒の少ない内面も平滑に篋磨きされた土器を注出すると（第14図19，23，36）などが挙げられるが、但し（第14図18）の内面は、刷毛調整である。

(1) 文献 八幡一郎 「信濃国下高井郡佐野の土器」『考古学』3-3 昭7（1932）

栗林I式期

昭和31（1956）年『信濃考古綜覧』において、永峯光一氏によって栗林式の形式設定がなされ、先行形式の伝統を保持しながら、新たに櫛描文の手法がみられるものとされた。壺の器形は、短頸から長頸に変化が基本で、篋描文、櫛描文で華麗に器面を飾る。ここでは、この両者の文様のみられる土器を注出して考察してみる。（第15図26～28）は、壺上半部の破片で、縦の篋描楕円文の中に櫛描の直線文を垂下させて充填させている。（第7図参照）

篋描で、横線文を作り、その間を櫛描直線文（6本単位）刺突文で充填し壺腹部最大径に円形貼付文をつけて、その部分は篋描で重山形文を施文した土器（第15図42，44，50同体，43）なども典型的な標式タイプで、貼付文も畿内系の土器の影響をうけている。この様にみると、当然畿内系の櫛描文の影響を受けた土器、例えば、北陸の小松式（細い櫛描文）影響が考えられ、栗林式土器そのものは、先にみて来たように、県内のそして善光寺平の先行形式を踏襲した中に、畿内第3様式の影響をうけているとすれば、該期の搬入土器（客体土器）の注出も重要な作業と考えられる。（第17図92）は甕の頸部の細片で、簾状文（6本単位）と縦走の波状文と円形刺突文がめぐらされている。

次に櫛描文の顕著にみられる土器は、（第18図104）壺上半部の破片で、精緻に櫛描直線文

を幅広施文し胴部最大径部に半月形刺突文がみられる。橙色の器色内面は、平滑に篋磨きされているが、胎土には、砂粒が多くみられる。(第17図98)は粗の櫛描文(6本単位)の土器で、器面観察からは壺形とみられるが、口縁部が欠損しており、確定しがたいが、長野市新諏訪町遺跡出土品の甕にみられる文様である。この影響をうけたと思われるものは(第15図44)の壺の上半部の破片で、篋描の縦横の区画内に半月形刺突文がめぐらされ、下に、篋描(5本単位)で縦長の直線文と波状文が描かれている。次に今回の資料で、ややまとまっている壺は(第15図40, 46)は上下に接合。頸部近くに篋描の楕円文がみられ、横線、胴中部に三角状の区画がみられLR縄文を充填して、下に曲線状の区画内に櫛描の充填文(4本単位?)がみられ、縄文、櫛描文を施文後に篋描で区画、磨消していると観察される土器が、今回出土の栗林Ⅰ式の標式タイプと考えられる。

次に甕形土器をみると、コ(匚)の字文の土器(第17図77)は、LR縄文と篋描文を併用しており、(第17図78)は、文様の接点に円形貼付文が付加されており、古相に属すると思われる。栗林遺跡では、甕形土器に綾杉(羽状)の条痕状の文様がみられ、注意されていた。これは、水神平式土器において顕著にみられる文様で、畿内の弥生土器に対して独自性を主張したとされる紅村・工楽両氏の見解があり、この影響が栗林式土器まで影を落としていると思われる。施文と整形を兼ねているが、文様化しており、板の整形具に浅く櫛歯状に刻みをつけて撫で施文したと思われる。(第17図75, 91, 94, 117, 118)これと似た施文に5本単位の櫛歯状の工具で、縦の綾杉状の施文をした土器がみられる。(第17図86, 87, 115)前者が、内面に刷毛痕を残さないのに対して、これらの土器の内面には、刷毛目痕が顕著である。

その他、栗林Ⅰ式と考えられるのは(第14図12)壺の肩部に篋描平行文間に半月形刺突文を囲繞させたもの、(第14図14)の同じ壺肩部に篋描平行線間にLR縄文を押捺し、さらに篋描波状文を描いたもの(第15図30)の壺上半部全面に縄文を押捺し篋描平行文と連続山形文の土器などが挙げられる。

赤彩土器の出現

栗林式土器の組成中に赤く塗彩された土器が登場してくるのは、今回の調査資料からは、検分できないが、壺形土器の破片を観察してみると、壺の部分的赤彩から小形土器の赤彩が開始されたように思われる。(第18図101)は、口縁が朝顔形に外反する器形で、頸部の篋描平線の間櫛描の直線文がみられる土器で、赤彩はされていない。(第13図15)は、前者に比べて口縁は、さらに、(第18図119)の頸部の短い小形壺、(第12図4)の蓋付の鉢、高坏では、(第12図11)の脚の短いもの、(第12図10)の頸部に突帯のある高坏などが登場してくると思われるが、Ⅰ・Ⅱ期の画期をどこに求めるか、この赤彩土器の登場にも関係がありそうである。

栗林Ⅱ式期

壺の頸部の文様の集約化に具象されるⅡ式への変化は、大形の長頸壺の出現に表裏の関係があるように思われ、稲作農耕文化の成熟度に関係すると思われ、飾られる土器の赤彩傾向は益々大型化してくる。提示した資料では、Ⅱ式期は少ないが、壺では、(第13図16, 17, 20, 39, 54, 55)などが挙げられる。(神田3, 6, 7, 坪井1, 2, 3, 5, 桐原52, 53, 85, 86)などがある。甕形土器では、口唇部、腹部全面に縄文が施文される。(第17図74)は、佐久市北西の久保遺跡出土品にみられるから、Ⅱ式期に刻当せしめたいと思われるが、地域差を考慮すれば、削古するかもしれない。

櫛描文のみの土器は、甕の(第17図85)の類格子目状と横線文、(第17図90)の格子目文と横線文、(第17図93)の密に波状文が施文される甕形土器は、箱清水式土器に類例の求められる土器だが、口唇部が平縁に作られる点を指摘しておく、(第17図83, 95)は波状文を縦の直線文で切る文様だが、(第17図83)の半月形刺突文には、平織の圧痕がみられ、復原の糸の太さは1mmと思われる。(第12図12, 第18図112)の甕は、口唇部LR縄文を押捺し頸部に櫛描直線文、下に同波状文がみられる。(第12図5)の甕の櫛描文は、羽状文の便化した施文がみられるが、施文具が、栗林式の条痕状であるのと内面が、篋磨きされている。

既出資料では、(神田30~32, 35, 38)などがあり、瓦粘土採取場採集の他の土器を弊見すると、Ⅰ式に属する土器が多いから、資料操作上に誤りがなければ、これらの土器との伴出関係が、問題となってくる。

赤彩土器、高坏は、この期には確実に登場してくる。(第12図10, 11)で、ほぼ同一時期に両者がみられ、当地方の箱清水式まで連続する。鉢も鐏広の口縁の大形のものが登場し、(第13図14)。口縁に小突起をもった鉢も、厚く赤彩されている(第16図73, 74)。また折り返し状口縁の大型鉢(第17図80)もあり、口縁が肥厚して蛇頭状を呈するものもあり(第17図81)、土器の大形化が目だってくるのは、ムラの祭儀に供献された赤色塗土器の呪術性が重視された結果だろうか。大型の壺も底部までも赤彩される(第13図19)また口唇部に小突起が2対追加された。細頸の壺もある(第13図17)

弥生後期 箱清水式期

栗林遺跡には、弥生後期の遺物も地点によって僅か、みられるが、量的には少量で、この時代の集落の主体は、南方の台地上を主体とする安源寺遺跡に移動しており、栗林遺跡の南方にみられる低湿地の小面積の水稲耕作地より、前面に広い范濫原をもった集落へ移動したものと考えられ、社会構造の変化もこれらを助長したと思われる。

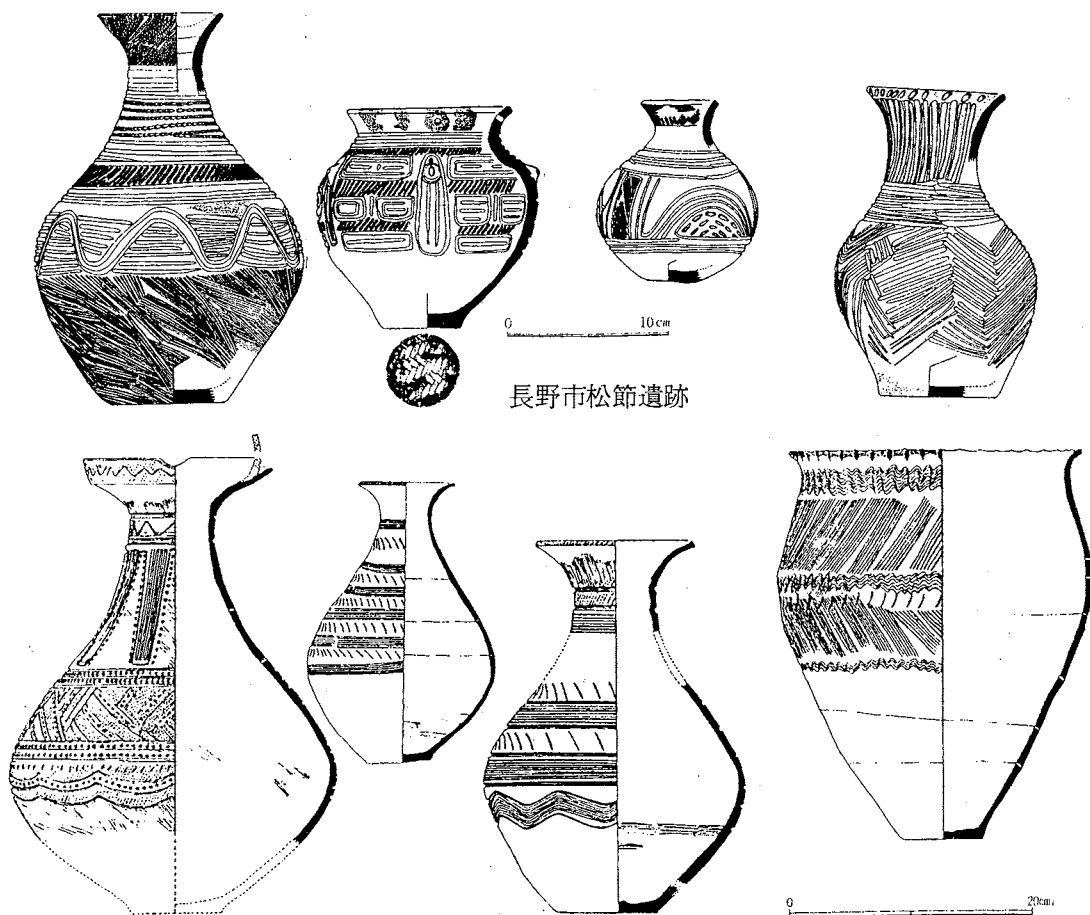
歴史時代

栗林遺跡には、弥生時代以後の遺構も散在しながら残されている。(第13図21)は、国分

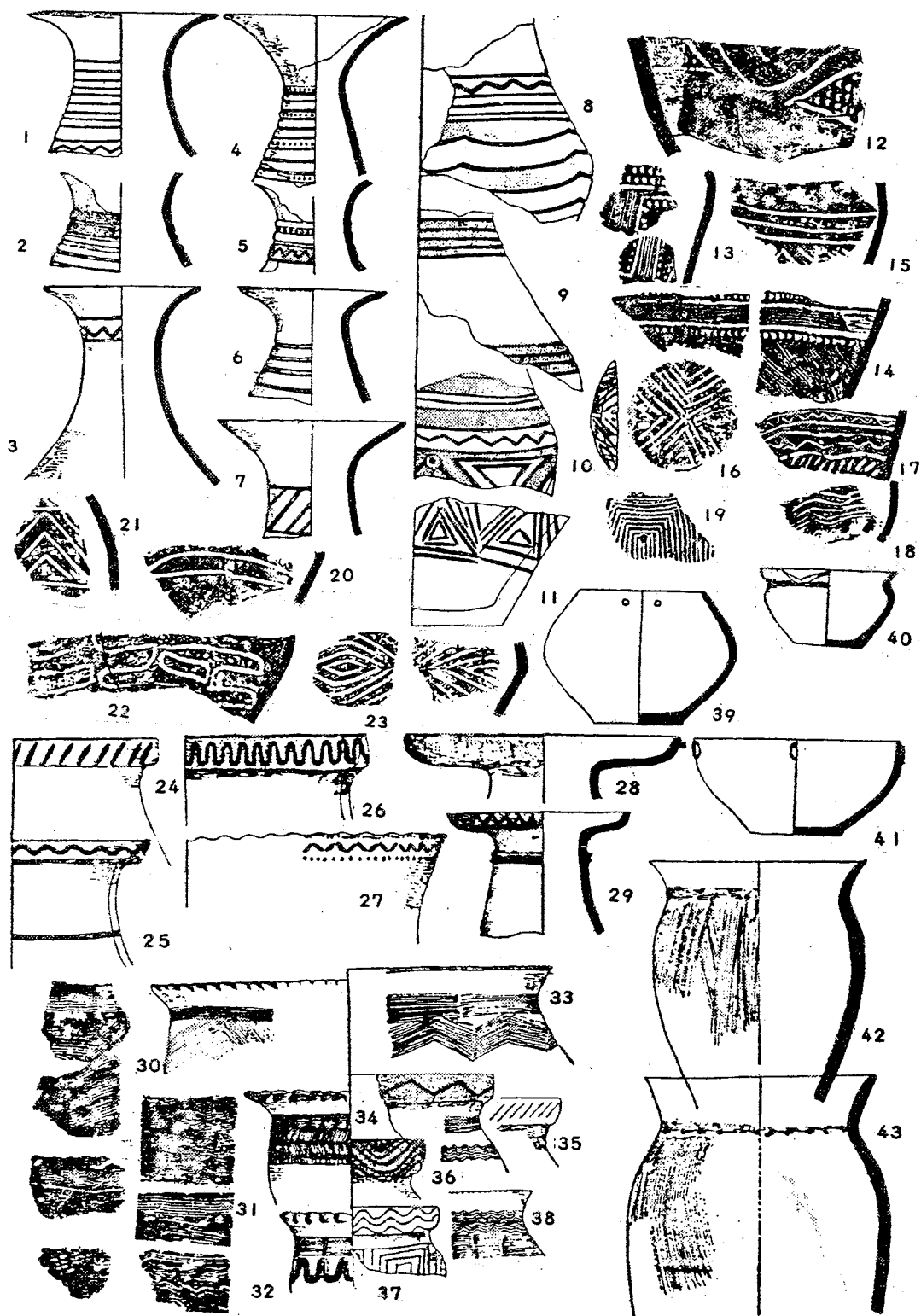
期の内黒坏で、(第20図5)は、同じ内黒坏の底部の記号で「ナ」と刻書されている。(第20図1)は煮沸用の土師質の甕の破片で叩き手法などは、須恵器の技法と同一である。

須恵器の破片も遺跡内で、たまたま発見される。第20図は、1と5を除いて須恵の甕の破片と思われるもので、7世紀後半には開窯していた須恵器焼成の高丘古窯址群(現在確認されているものは40基以上)の地元産と思われる。内面に青海波文様を残すものあり(同図6)、磨り消しをしているもの(同図9)がある。(同図8)のごとく突帯の見られるものもあり、奈良時代から平安時代前期に位置づけられる。

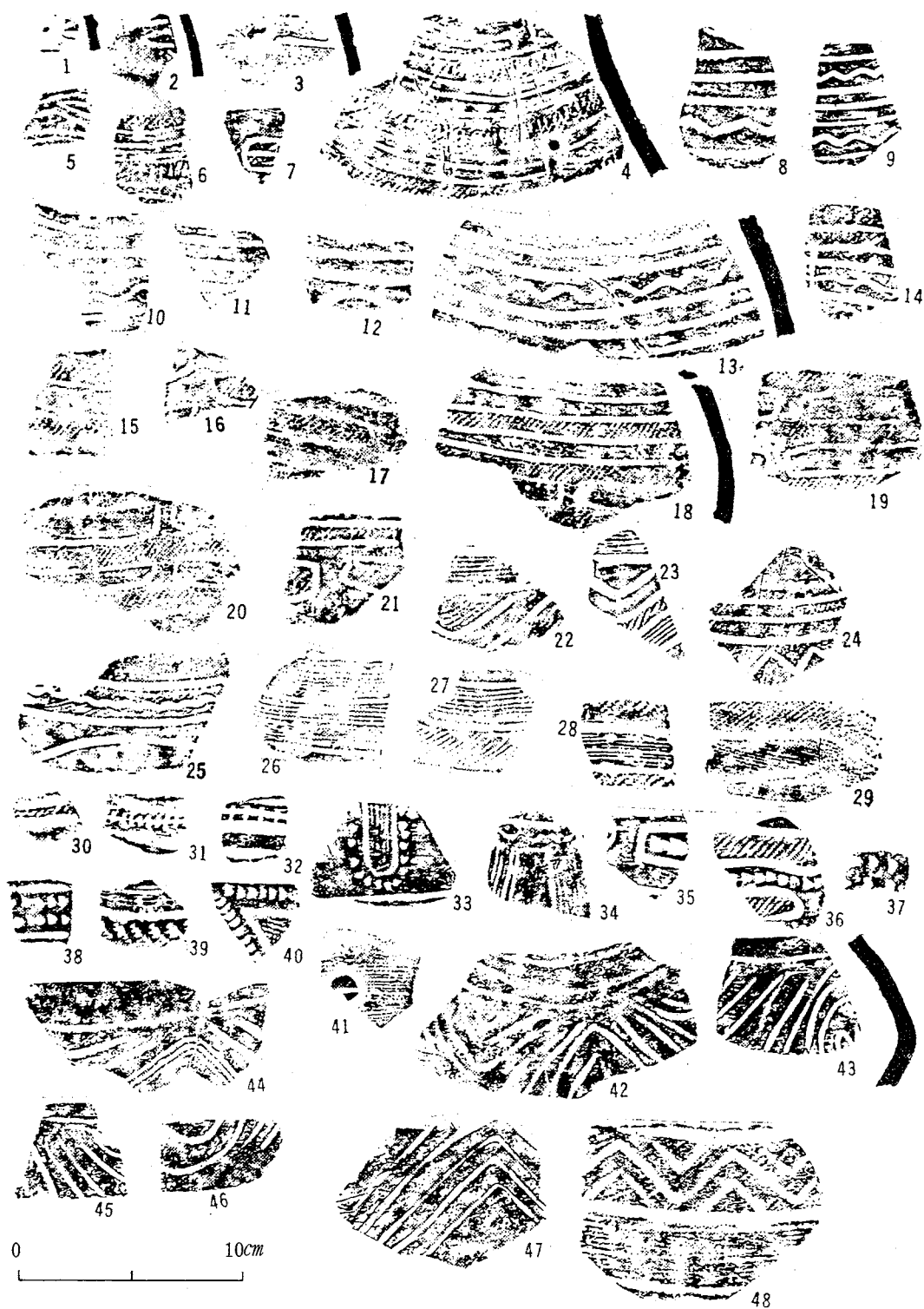
この他にも灰釉の破片などがみられ、中世の青白磁の検出された第4次調査地点もあり、現在まで連綿と人々の営みが続けられている。(檀原 長則)



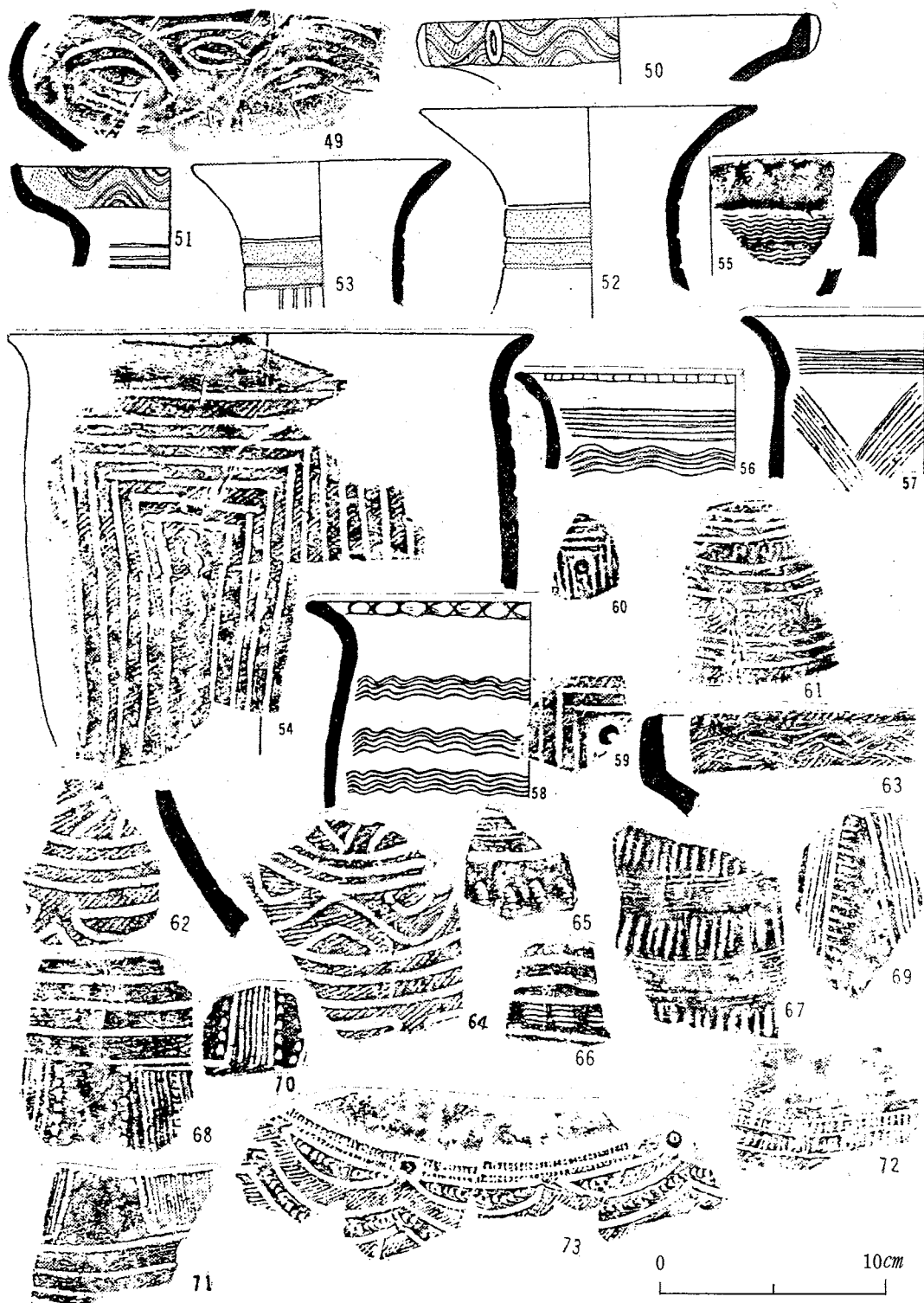
第7図 長野市平柴平遺跡



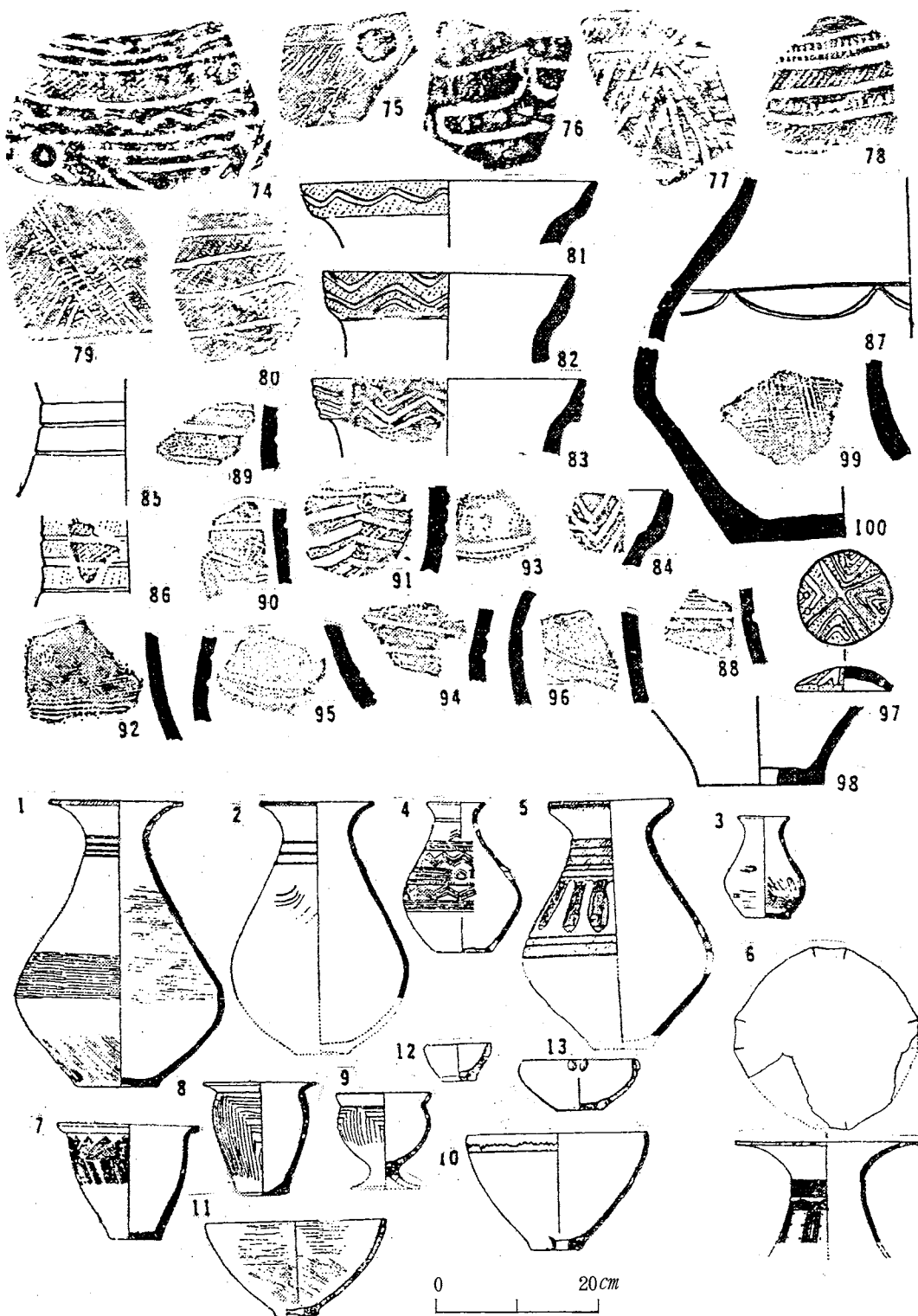
第8図 栗林遺跡既出土器（神田）



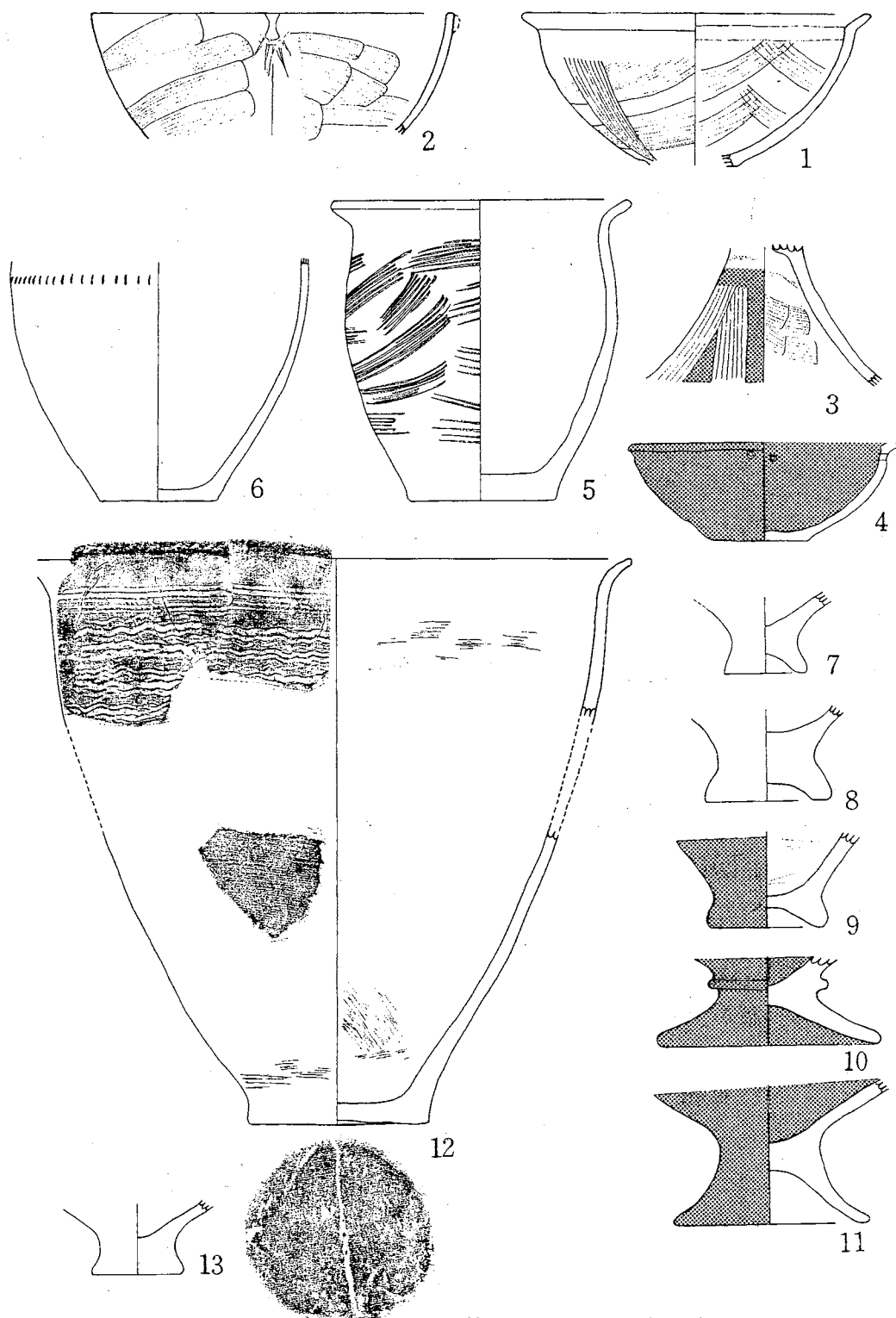
第9図 栗林遺跡既出土器（桐原）



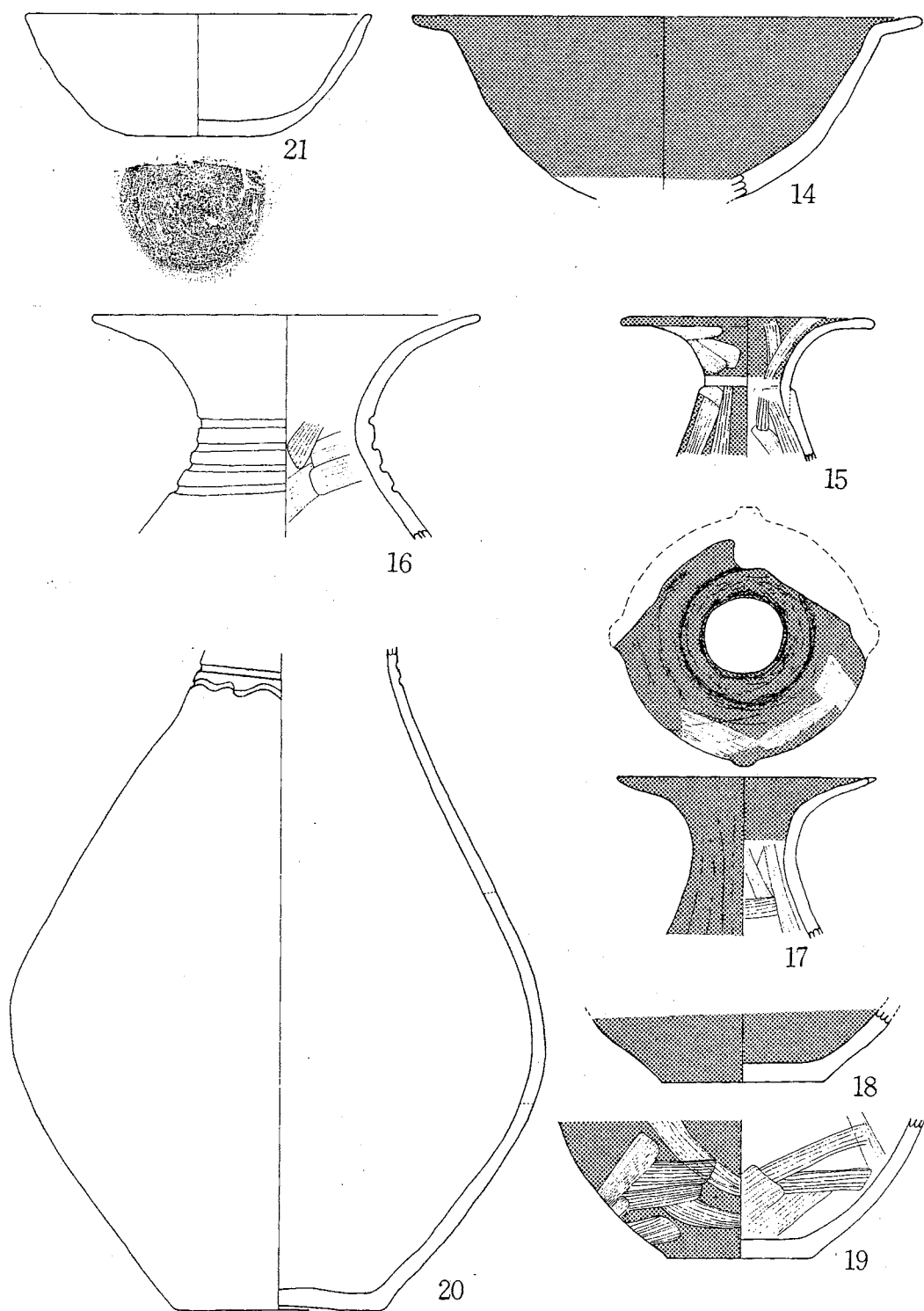
第10図 栗林遺跡既出土器（桐原）



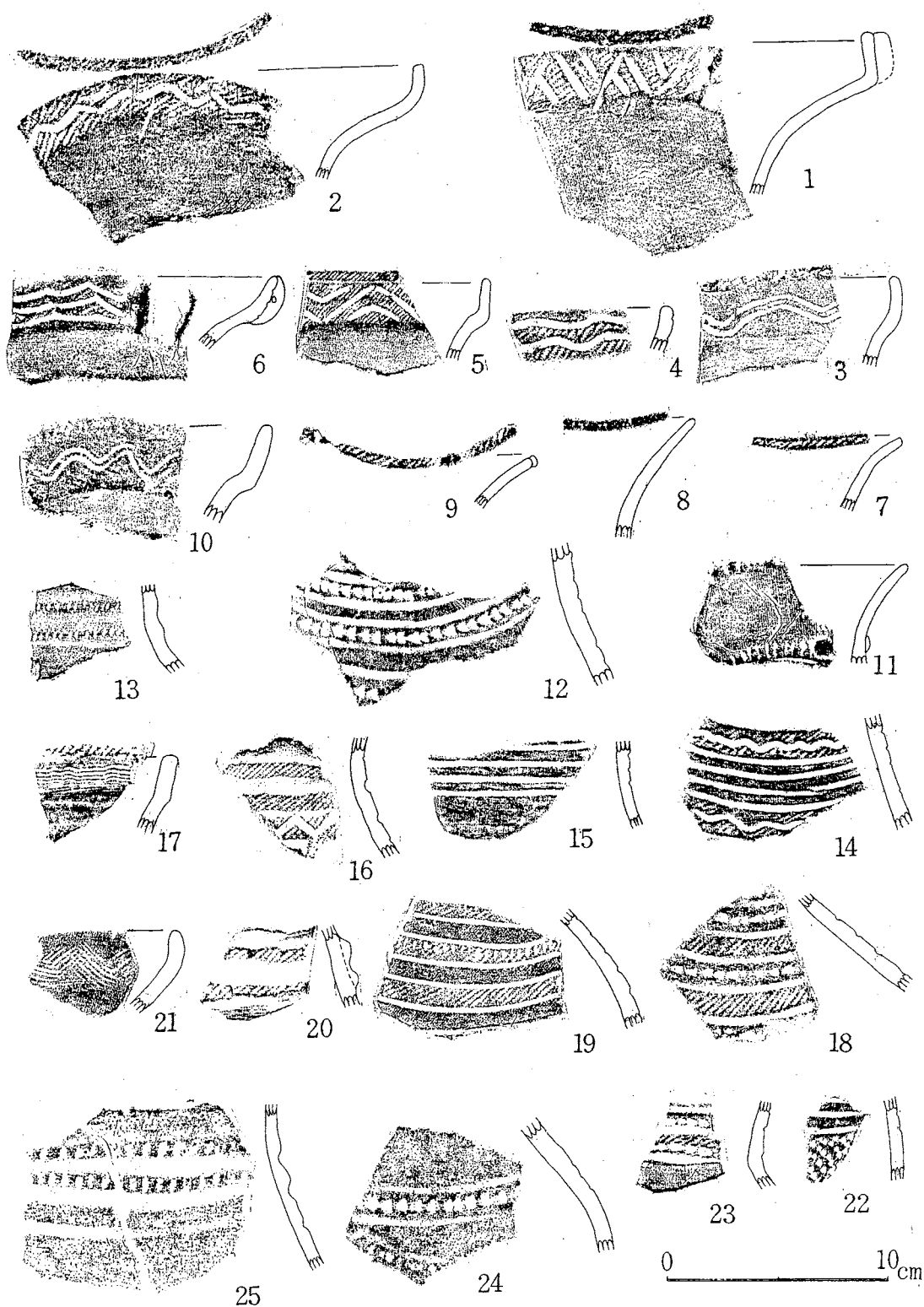
第11图 栗林遺跡既出土器（上・桐原、下・坪井）



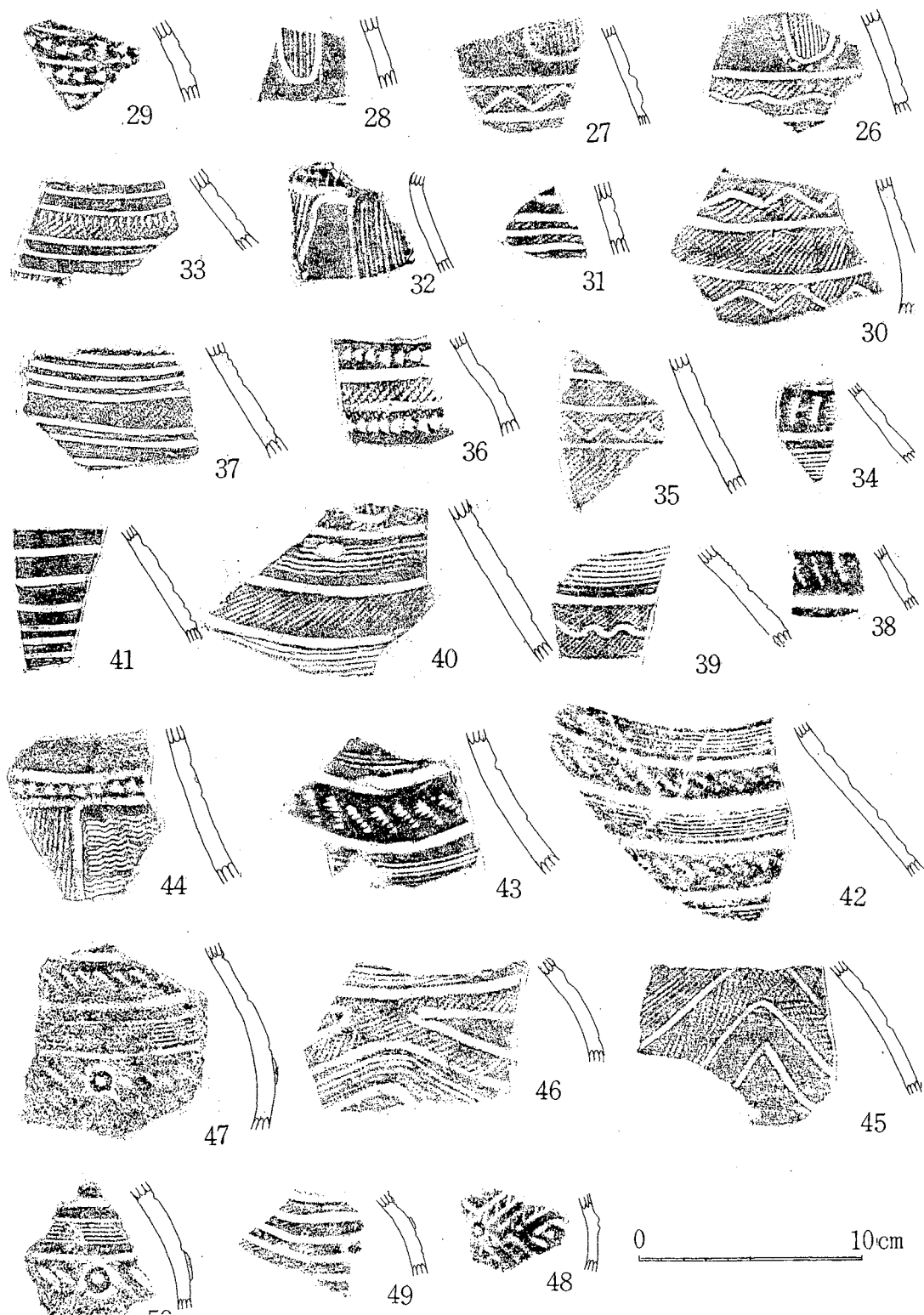
第12図 昭和62年調査出土土器実測図



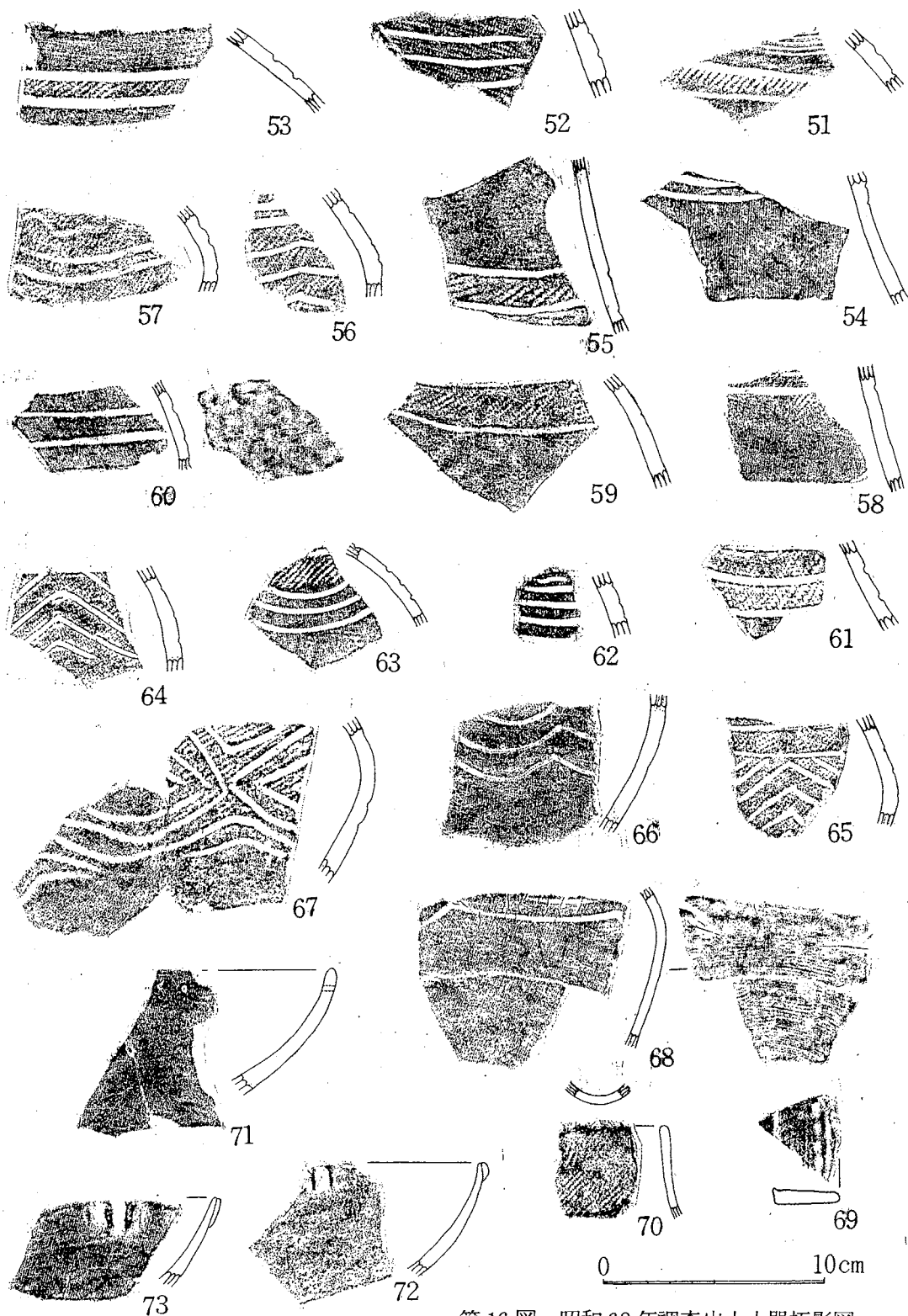
第 13 図 昭和 62 年調査出土土器実測図



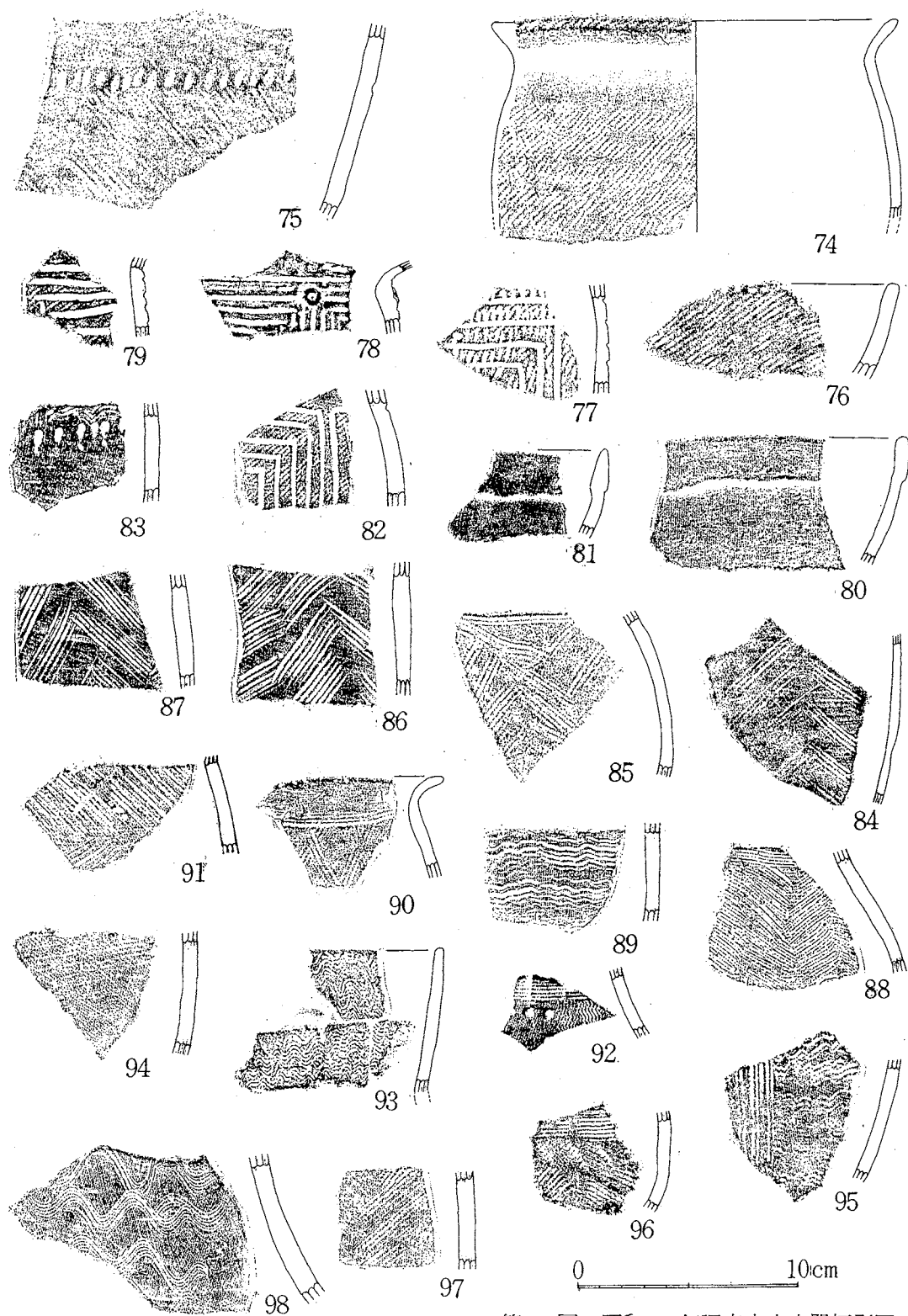
第14图 昭和62年調査出土土器拓影图



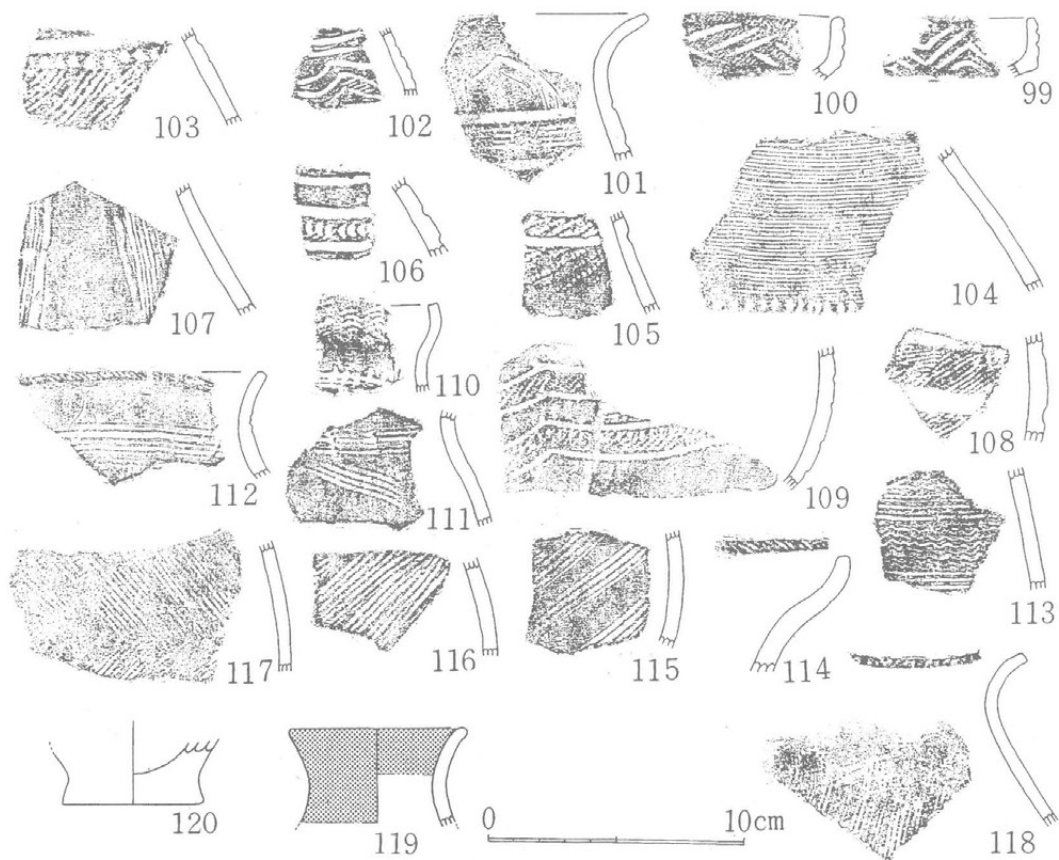
第 15 図 昭和 62 年調査出土土器拓影図



第16図 昭和62年調査出土土器拓影図



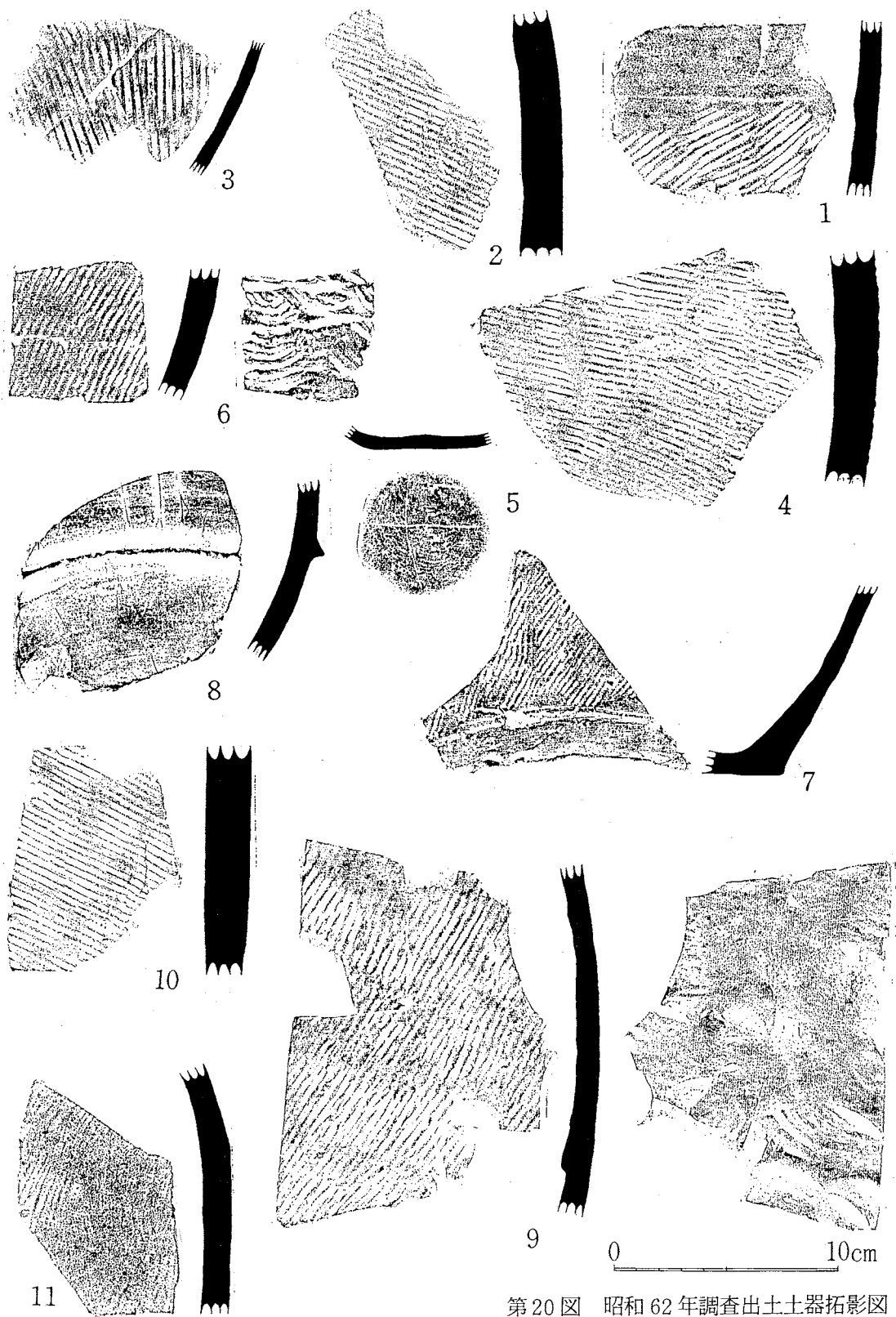
第17図 昭和62年調査出土土器拓影図



第18図 昭和62年調査出土土器拓影図



第19図 刺突文に織布痕のある土器片



第20図 昭和62年調査出土土器拓影図

石 器

1 石 戈 (第22図7)

発見された有樋石戈は、基部の破片の硬質緻密な青黒色の閃緑岩製で、同遺跡発見の蛤刃磨製石斧の石質に比較して、質的に有品である。穿孔は、ほとんど片側よりなされ僅かに反面より穿孔されている。有茎であったと推考されるが、折損のため形状は、不明である。横断面(鎬)は、ふくらみを有する菱形で、刃縁には、研磨の前段階の擦痕を残している。検出された位置は、(25-4-1)旧千曲川岸に面した自然堤防上に位置し、伴出した土器片は、コンテナ2箱分に及び栗林Ⅰ・Ⅱ式期の所産と思われる。(第14図5・19・24, 第15図33・34, 第16図65・70, 第17図88)

下條信行 (1982)⁽¹⁾によれば、石戈の出土は、全国で130例程知られ「九州型石戈」(無樋有茎・無茎)と「畿内型石戈」(有樋有茎)に二分分類され、その退行形が、長野県を中心に群馬・新潟県に分布しており、新潟県中頸城郡潟町出土(後藤1930)、群馬県富岡市鍋川底出土例(森本1943)が古くから知られている。北信では、長野市平柴平遺跡の土壌内より栗林Ⅰ式土器に伴い出土しており⁽²⁾、松本市沢村遺跡出土例⁽³⁾さらに下水内郡豊田村笠倉遺跡例は、⁽⁴⁾長野県史では、「有溝石剣」と表現しており、基部が不明のため本例は3例目に当り、発掘調査例では、2例目に当る。磨製石剣は一般に(A)有樋式(銅剣形)(B)有柄式(C)鉄剣形(D)変形鉄剣形(有孔石剣)(E)有角石斧などがある。⁽⁵⁾これらの類品を桐原(1963)の集成を参考すれば、飯田市恒川遺跡(C)(D)、岡谷市普門寺(D)松本市沢村西畑遺跡(D)同市城山腰遺跡(C)上高井郡小布施町中条(D)飯山市瑞穂北和栗遺跡(D)同市豊田堀ノ内遺跡2例(D)同市蓮伍位野遺跡(D)中野市赤岩神宮寺下遺跡(D)下水内郡豊田村笠原遺跡(A)?(D)同郡栄村箕作(D)(単独出土)などが数えられる。この様にみても(D)類型が断然多く次に(C)類型となる。また県内では、東信地方に出土例を聞かず、千曲川下流地帯に類例の多いのは、金属器受容期の時期や、祭式などの時代相を反映しているとみられ(D)と(C)また有樋石戈形との三者の遺跡からの出土は、単品が多く恒川遺跡では、二者がみられるので三者或は四者の製作時期の違いや使用目的による形態の違いなどの検討の課題となる。本遺跡の石戈の如く樋のみられる銅戈は、本県大町市上諏訪神社蔵品にみられ⁽⁶⁾鋒が長く関と身の斜交が著しい点、内が横長、樋が直線的、側刃の幅が関近くで大きくなり、樋が鋒で合わず、背に鎬のある点など大阪湾型の影響をうけている⁽⁷⁾とされ、破片とはいえ本例からうける印象と合致する部分が多く、有樋銅材が近県或いは県内の先進の弥生文化受容地にもたらされ、その希少価値から模倣されたとみられるが、石戈から逆に銅戈の流入の状態を予想する事も可能である。本例は破片で発見されたことは、背後にある使用目的を種々憶測せしむるものがあり、佐原(1970)の1遺跡

1 例という有樋石戈の出土例のあり方から集落祭祀の儀器とした考えもある。

先学の業績を借りれば、朝鮮型の有柄式磨製石剣（九州地方）を出発点として日本型の武器形石製品である鉄剣形磨製石剣、石戈が出現し金属利器の変遷と連動して有樋式磨製石剣が生まれ、その影響下で変形鉄剣形磨製石剣（長野県など）、有角石器（関東東部地方）が生まれたと考えられる。今回検出された、銅戈形の磨製有樋石戈が、終末段階でなく古相を留めているのは、母胎となった金属利器の供給に影響をうけており、当地方の該期の石剣、石戈は、実用の武器と儀器の両面の性格が看取される。

文献

- 1) 下條信行 「武器形石製品の性格」『平安博物館紀要』第7輯 昭57 (1982)
長沼孝 「磨製石剣、石戈」『弥生文化の研究』9 弥生人の世界 昭61 (1986)
- 2) 笹沢浩 「平柴平遺跡」『長野県史』考古資料編 昭57 (1982)
- 3) 小野勝年 「下高井地方の考古学的調査」『下高井』昭28 (1953)
信濃史料刊行会 『信濃考古綜覧』下巻 昭31 (1956)
- 4) 桐原健 「信濃出土の磨製石剣について」『信濃』Ⅲ 15-4 昭24 (1949)
- 5) 長沼孝 「石の武器」『弥生文化の研究』9 昭和61 (1986)
- 6) 大場磐雄 「信濃国安曇族の考古学的一考察」『信濃』Ⅲ 1-1 昭24 (1949)
- 7) 難波洋三 「戈形祭器」『弥生文化の研究』6 昭和61 (1986)

2 石包丁（第22図3・4）

両者とも中央部の破片で中央に双孔をもち穿孔は、上部に両側よりなされている。穿孔側の背は半円状をなすと思われる。石質は安山岩で、(3)は白灰色を呈し黒雲母が含有され、(4)は斜長石が斑状（降雪状）に組成している。両者とも2孔間の心々の長さは約2cmで、指の幅とはほぼ一致する。（筆者の中指の幅は2cm）(4)の穿孔は中央点よりやや偏在しており身は直線形で、刃部は、基本的には片刃形で片側より僅かに研磨されている。本例は、復元すれば、大形の部類に入るとと思われる。

石包丁は、稲の穂摘具とされ栗林遺跡では、二孔の大形品がみられ、桐原（1957）の『信濃考古綜覧』集成時以来、単孔直刃の磨製石包丁ばかりであり、周辺の該期遺跡も同傾向で、本遺跡からは、打製石包丁と思われるものは、現在まで発見されていない。南信、飯田地方の単孔の磨製のものや、打製石包丁とは対象的であり、稲作定着の時期と経過、生産基盤の差異が、質や形態に及んだと考えられる。

使用時の把握の点からすれば、単孔より双孔形の方が後出的であり、本遺構発見品の如きは、稲作開始以来の打製石包丁→単孔石包丁→双孔石包丁の形式的変化があるとすれば、使用の試行錯誤の、のち完成したものといえる。なお本遺跡で発見される石包丁は、今回も破

片で発見され、使用頻度、破損、廃棄などの問題も資料の集積をまって検討したい。

3 太形蛤刃石斧 (第23図14・15)

両者とも閃緑岩製で、本遺跡からは、多数の発見例がある。形状は、種類の多い中形の部類で、(14)は刃部破断後、頭部を利用して敲打器(石槌)として使用された打痕を残している。破断痕も両者とも類似し、同一の使用状態が考えられ、中辺部で、短辺に対してやや斜状に破断して端部に至って深く欠入している。これは、割斧として使用され欠損状況、個所が似ている類品が多いのが注目される。

4 小形磨製石斧 (第22図1)

玄武岩質の小形の磨製石斧で、頭部が欠損している。剥離、研磨加工しているが、剥離痕が残されている。弱凸強凸片刃円刃形で、加工具と使用された、弥生時代の所産と考えられる。

5 小形磨製石斧 (第22図2)

蛇紋岩製で、弱凸強凸刃円刃形を呈し身は、やや湾曲している。全体に磨滅が進み、形態から縄文式の所産と思われる。

6 凹石 (第23図12・13)

12は、赤褐色をした粗笨な安山岩の河原石を加工したもので、大きく中央部が凹んでいる。13は、青灰色をした同質の石で、石の大きさに比べて凹部は小面積である。二者の検出位置は、距離的に近く発見されている。この凹石の類いは、第一次発掘時の坪井(1953)の報文によれば、L地点において西側には土器ばかり、東側は小石が多く集積され東南隅より6個の凹石がかたまって出土した。同例は、中野市田上、寺の前遺跡の調査(1955)においても、集石土壇墓状の端より2個の凹石が検出されている。この様に集石と凹石の関係は、住居の廃絶に伴う集積とばかり考えにくい点がある。(A)単に石として集石、(B)発火具とした。(C)墓址遺構に伴うもの、(D)小規模な舂摺(小さな堅件で舂の皮を剥ぐ)(E)骨肉の粉碎、混合、薬草の調製具などと考えてみたが、集石と凹石の事例の集積をまって検討したい。

7 石鏃 (第22図5・6)

5は、黒曜石製の凹基無茎鏃である。先端部から脚部に向かってほぼ直線的な両側縁をもつ、基部のえぐりは全長の約 $\frac{1}{5}$ に及び、脚部はやや円みをおびる。側縁部の調整は表裏か

ら交互に押し圧剥離が、丁寧なほどこされている。



6は、頁岩製の凸基有茎鏃で先端部が欠損しているため全長は不明だが、復原径は、3cm位と推定される。形態は、長軸が短軸の2倍以上を測る柳葉形をとる。右側縁にわずかに鋸歯状側縁状の調整が表裏同一にほどこされている。茎部は縦軸に対してやや左側にずれている。茎部の作り出しも明確な調整剥離がなされていない。表側が凸状を呈するに對し裏面は石核の剥離面を整える程度の僅かな調整の後、側縁のみに調整がほどこされて平面的であり、断面は、半円形を示す。二者とも弥生時代の遺物と比定されるが、前者の調整が精緻に對し後者は粗雑である。栗林遺跡の石鏃はかつて神田（1935）は、下高井郡山ノ内町佐野遺跡（縄文晩期）出土の石鏃と類似を指摘されているが、狩猟用とともに、土器の変遷よりみれば、稲作農耕社会が、相当進んだ段階と考えられるので、軍事的緊張に伴うものとの検討が必要だろう。

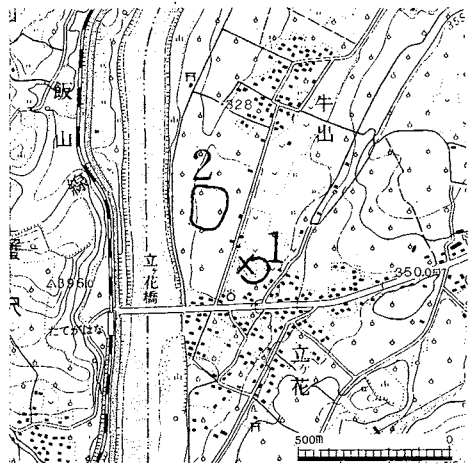
8 砥石（第23図16）

砂岩を三角形に加工したもので、火熱をうけている。図示していないが他に細い溝のみられるものがある。これは、玉、石斧、金属器の研磨砥石として使用されたものだろう。

9 五輪塔空輪（第23図17）

暗灰青色の軟質な安山岩を加工した五輪塔の空・風部分で、下部の円は、小円ではない。円頭の上にイボ状の突起があり、中辺に段を作って空・風に分けている。下部は安定のため中央部が凹んでいる。形容が室町時代の特徴を現し造立年代が推定される。

この五輪塔は、高丘台地の千曲川に面したベルト地帯を限ってみても、栗林（牧山）地籍の光海寺跡からも五輪塔多数が発見され、同じ畑かん事業で、62年8月に立ヶ花西原地籍の本誓寺跡と伝承される畑より空・風輪大中小27個発見され、接合部に「ホゾ」の有するものや、「南無」と刻字されたもの4個、「・」（キャ・カ）が2個、火輪が5個で、「阿弥」と刻銘されたものもあり、水輪は4個と石臼（下部分）が発見され、地輪は、掘削作業の深度の関係から検出されていない。これらの埋没は、水害などによると考えられるが火輪の屋根の形式に変化がみられるから、今後に再調査が望まれるとともに、中世史研究の好資料と考えられる。



第21図 本誓寺跡

1. 本誓寺跡 ×は五輪塔出土地点
2. 牛出城跡

本誓寺は、磯部六ヶ寺（下総下河辺・浄土真宗）の系で、七代性順の時に信濃に移ったといわれる。「本誓寺文書」（本誓寺は上越市に現存）によれば、「中野氏の被護のもとに中野の地に光堂を建ててもらい繁盛し、つぎに頼った笠原氏も討たれてしまったので、その遺言により師聖は牛出に移った。中野氏は没落のとき牛出へ越しており、ここへ御堂を建ててくれた。

この御堂の屋根の葺きようが、高梨殿の御意にかなって「牛出ぶき」と呼ばれた。そして高梨氏の招請で中野に移って、阿弥陀堂を建ててもらった（後略）。」（中野市誌歴史編参照）この本誓寺の遺跡が、現在の立ヶ花西原地籍の五輪塔出土地で、過去にも五輪塔が発見されており、歴史考古学の好資料として活用したいものである。

10 その他（図示していないもの）

凹石

小さな凹みが、中央部に連結してみられる、黒雲母の含んだ、粗笨な安山岩製で、半分欠損している。

円石

長径6.5cm、短径4.5cmの玄武岩の円礫で、磨研が加えられている。手に握るに格好な大きさである。食料の破碎用か、投てき用などとみられる。

小盤石

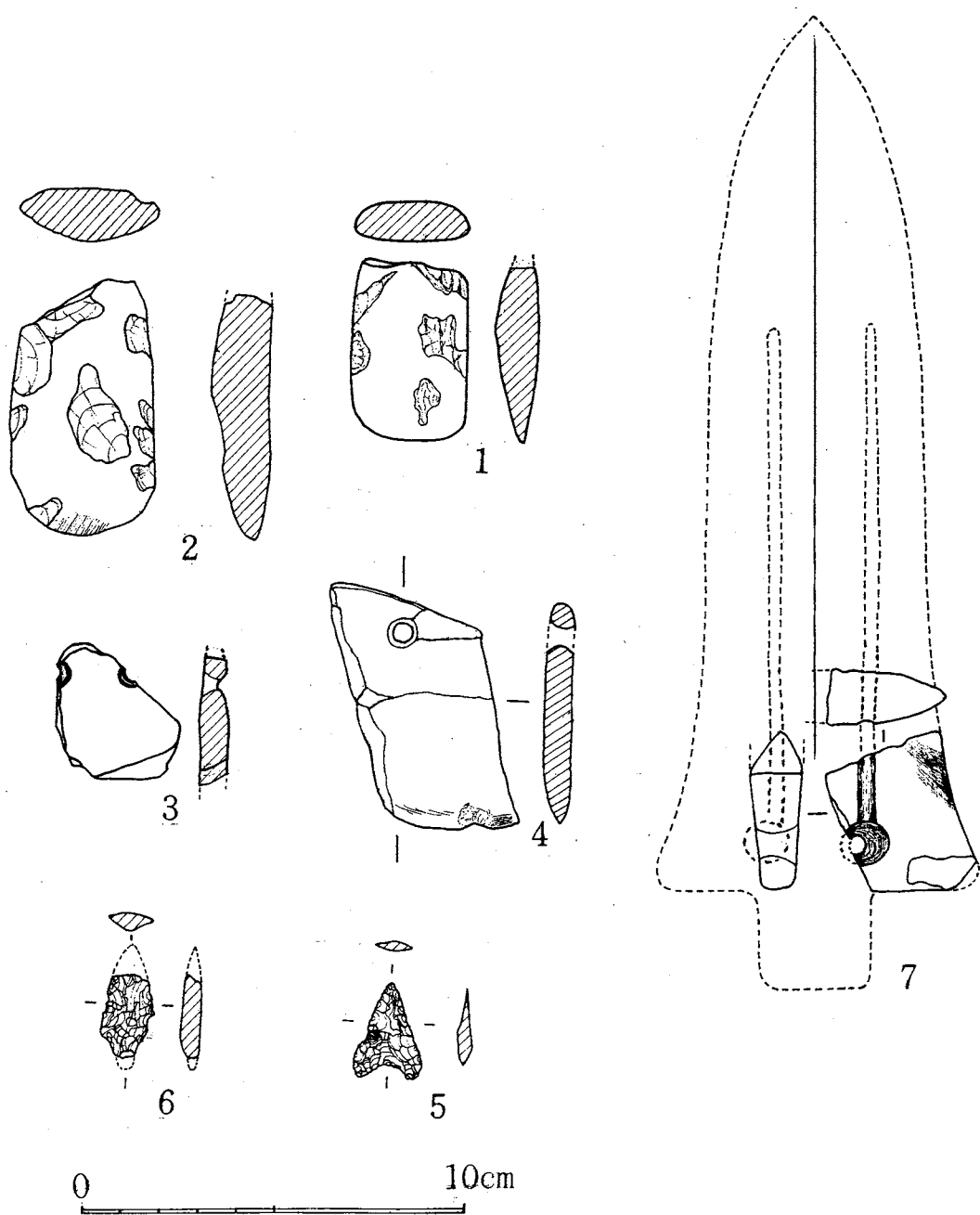
安山岩の厚さ3～4cm、大きさ10cm²内外の大きさで、中には火熱をうけたものもみられる。石包丁の原料の石と同質である。用途としては、火熱に強い石なので「保熱用」「煮沸用」などが考えられる。

11 栗林遺跡の既出石製品

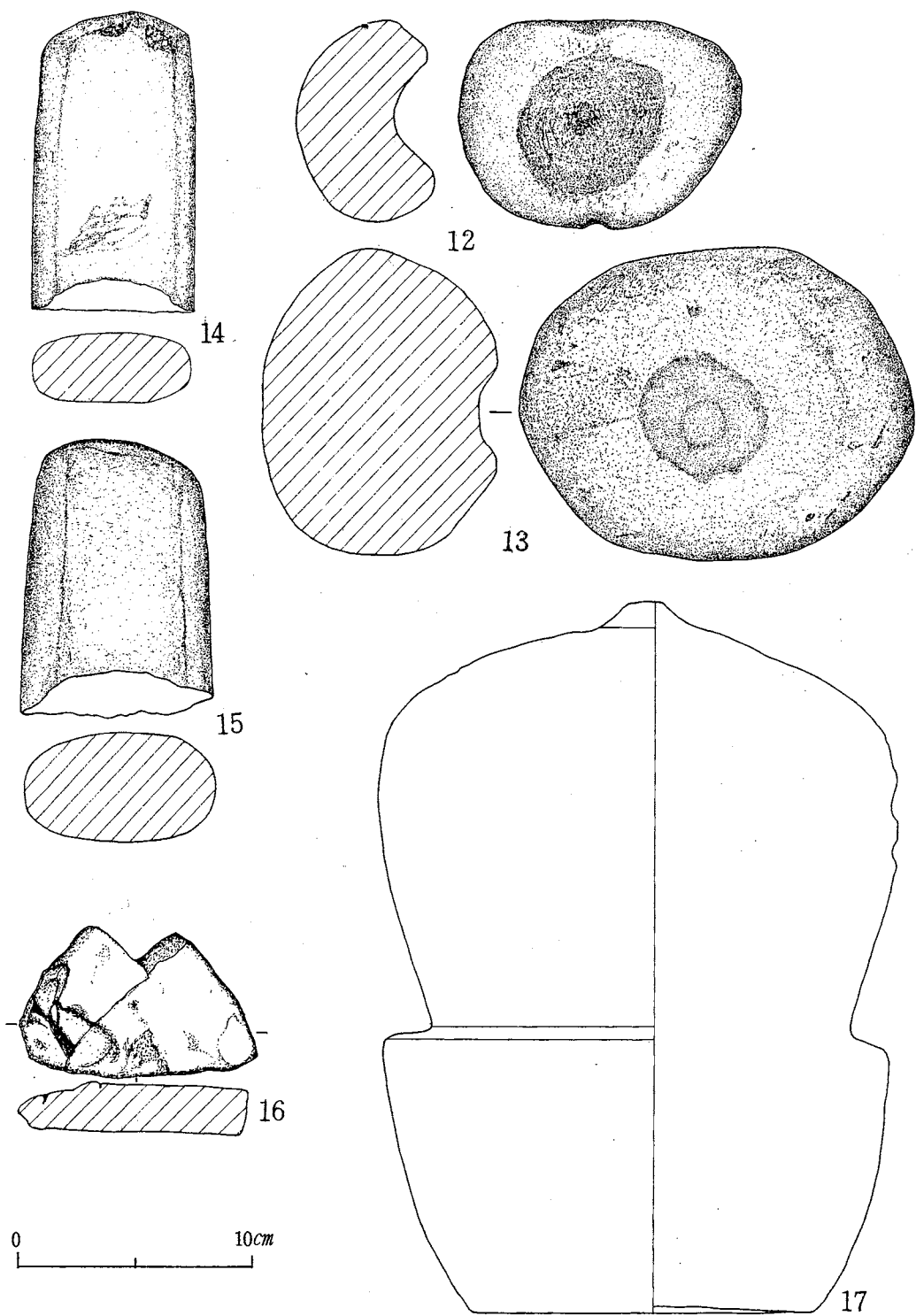
本報告書を読まれる人に詳細は省略させて戴くが、本報告書記載以外の既出遺物を記載すると、次の通りとなる。

磨製偏平片刃石斧、同小形偏平片刃石斧、同小形桂状片刃石斧、磨製石鏃、石錐、石錘、細形管玉、勾玉、丸玉、管玉未製品。

（檀原 長則）



第 22 図 栗林遺跡出土石器実測図



第 23 図 栗林遺跡出土石器五輪塔実測図

第3章 結 語

今回の調査は、先述の如く学術上の知見を満足させる点では、やや遺憾の点がみられたが、遺跡の保護との両立の問題もあり、地権者の栗林遺跡の学術上に占める重要性の認識が、いま一步の感があった。これは、日頃の啓発が不足している面も否定できない。その意味でこの報告書では、昭和初年以来の研究史によって本遺跡が、本県弥生文化を語るにどのような位置づけをしめるかを、先学の業績をたよりに略述した。長野県の弥生文化が、主として畿内地方から流入し縄文晩期の亀ヶ岡系文化と渾然融和する過程に、東海系の条痕文系文化の影響もみられ、水Ⅱ式にみられた土器の無文化の傾向から、栗林式の前段階の土器は、上半部に縄文、篋描文によって多彩に加飾している。この段階を経てこの伝統の上に畿内櫛描文土器の影響を受け、縄文、篋描文、櫛描文の三者の併用が認められ、この階梯を栗林Ⅰ式としている。したがって櫛描文のみられない段階の土器は、栗林Ⅰ式（古）と考えられ、櫛描文の客体土器も伴出すると予想されるが、今回は、明確にはできなかった。この様に櫛描文が多様される土器は、この地方の弥生後期まで引継がれる。この様に栗林式土器は、中部山地の人々が、弥生文化を受容してから、言い換えれば、縄文と弥生の棲み分け時代から、弥生文化に、完全に包摂されるまでの過程を経て、確実に弥生文化が定着した画期が栗林式文化で、以後この地方の農耕社会の繁栄の原点をなしており、栗林Ⅱ式期には、遺跡数が激増している。この様に栗林遺跡が学界に紹介されて以来、長野県の弥生文化の研究の原点をなしていると認識されこの重要遺跡は、地権者の御理解を得て永く保護されなくてはならない。

さて、今回の調査で、新知見としては、有樋石戈が検出され青銅器の分布圏からはずれた地方の集落祭祀のあり方を示す資料が検出され、出土した土器も従来から知られた内容に補足する程度であるが、畿内系の櫛描文の土器が、人の移動を伴ったものか、赤彩土器の出現時期、壺のみの器種の消長でなく全器種の組成と変遷を呈示してこそ初めて、栗林式文化の全容を把握できる資料の集積が望まれ、調査時の河原石、土器の集中個所も発掘面の制約から拡張、掘り下げができず今後性格の究明を残した個所があり、旧千曲川に面した自然堤防上延長約1000mに亘って展開された栗林遺跡には、更に未知の資料が、埋蔵されていると推考され、関連する周辺遺跡も視点に入れながら、今後も弥生時代中期後半に位置づけられる本遺跡の研究の深化と保存、活用を図るべきであろう。

（檀原 長則）

浜津ヶ池

第1章 はじめに

第1節 調査日誌

- 7月13日（月） 晴 結団式の後、グリットを設定し、農作業の都合によりDトレンチから調査を開始する。また並行して周辺地区の地形測量（1/100）を実施する。
- 7月14日（火）曇のち雨 前日に引きつづきDトレンチを掘り下げを行う。Bトレンチの掘り下げを終了。
- 7月15日（水） 晴 本日から重機を使用して表土削除を行う。D-3～5より溝状遺構、B-2～13にかけて土壌群を検出し、清掃の後写真撮影。Aトレンチの掘り下げ開始。
- 7月16日（木） 曇 Dトレンチ検出遺構の掘り下げ精査。遺物の出土皆無。午後雨天のため中止。
- 7月17日（金） 晴 Bトレンチ及びDトレンチ検出遺構の掘り下げ完了し、清掃の後写真撮影及び平面ならびに断面の測量。
- 7月18日（土）晴のち曇 Fトレンチ、Gトレンチ、Hトレンチ掘り下げ開始。Aトレンチ、Bトレンチ一部埋め戻す。
- 7月20日（月）曇時々晴 Eトレンチ掘り下げ開始。Aトレンチ、Bトレンチ埋め戻し完了。
- 7月22日（水）曇時々晴 Eトレンチ、Fトレンチ、Gトレンチ、Hトレンチそれぞれ遺構プラン確認のため精査。F-5～6から旧石器（剥片）遺物1点出土。G4より溝状遺構を検出する。
- 7月23日（木） 晴 前日より引き続く。
} E地区の断面測量。
- 24日（金） 晴
- 7月27日（月） 晴 Fトレンチ、Gトレンチ、Hトレンチ断面実測。
- 7月28日（火）曇のち晴 前日に引き続き、精査実測を行う。
- 7月29日（水） 晴 Eトレンチ、Fトレンチ残り分を掘り下げ。
- 7月30日（木） 晴 Gトレンチ、Hトレンチ残り分を掘り下げ、Eトレンチ、Fトレンチ断面実測を行う。
- 7月31日（金）曇のち晴 Aトレンチ残り分を掘り下げ。
- 8月1日（土）曇のち晴 Aトレンチ実測。

8月2日(日) 晴のち曇 残務整理をし、一時中断する。

10月22日(木) 曇 Iトレンチ、Jトレンチ、Kトレンチ、Lトレンチ、Mトレンチ
立ち会い調査するが出土遺物、遺構皆無、調査を終了する。

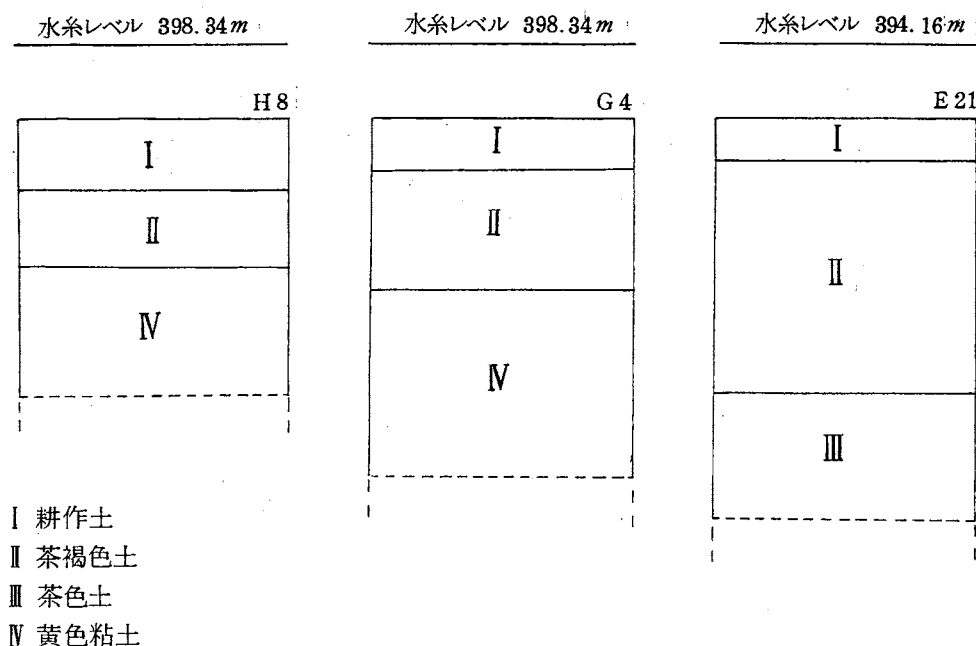
(徳竹 雅之)

第2節 層 序

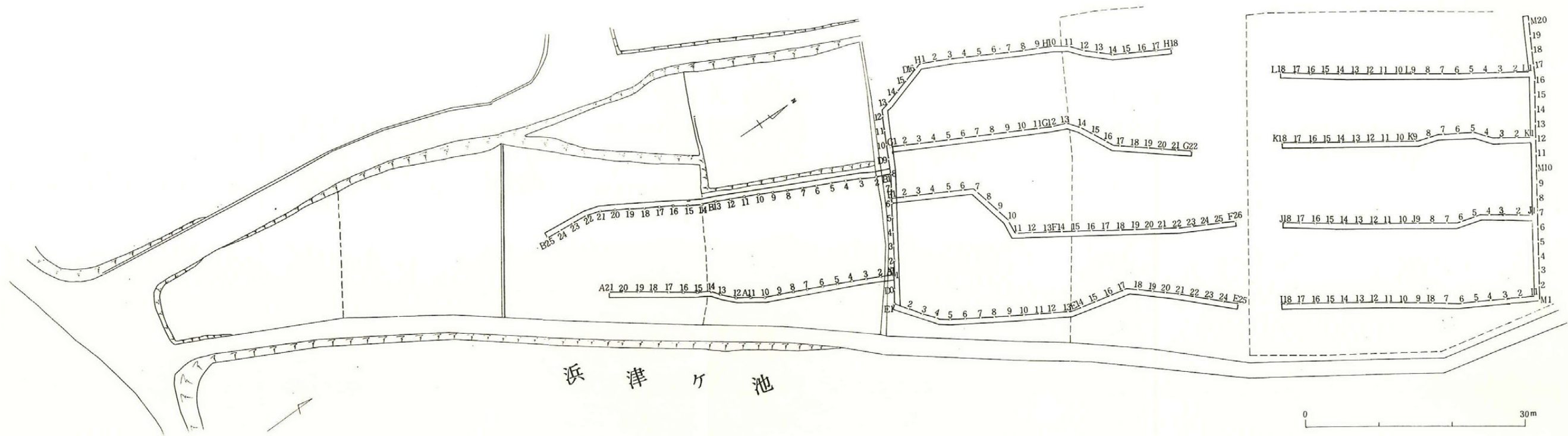
調査地は、浜津ヶ池の西側の丘陵地で池に向かって緩やかに傾斜し、池の外周道路に接している。現在は、果樹園としてリンゴ・ブドウ等が栽培されており、池の水面より約6mの比高をもつ。

調査の深さは、80cmと限定されていたが、土層の堆積層序は、次のI～V層が確認できた。第I層は耕作土で、山側では2cm、池側では20cmを測った。第II層は茶褐色土で、山側で5cm、池側で30cmであった。第III層は、暗茶褐色土で酸化した鉄分を含み、山側で3cm、池側で20cmである。第IV層は黄色粘土層の攪乱層で、山側・池側ともに20～35cmを測り、比較的厚く堆積していた。このIV層が原初の基盤の層位で、I～II層は後世の堆積と考えられる。第V層は青灰色土層であった。第III層が、昭和35(1960)年調査時に、70点余りの石器が出土した層であろうと推定される。

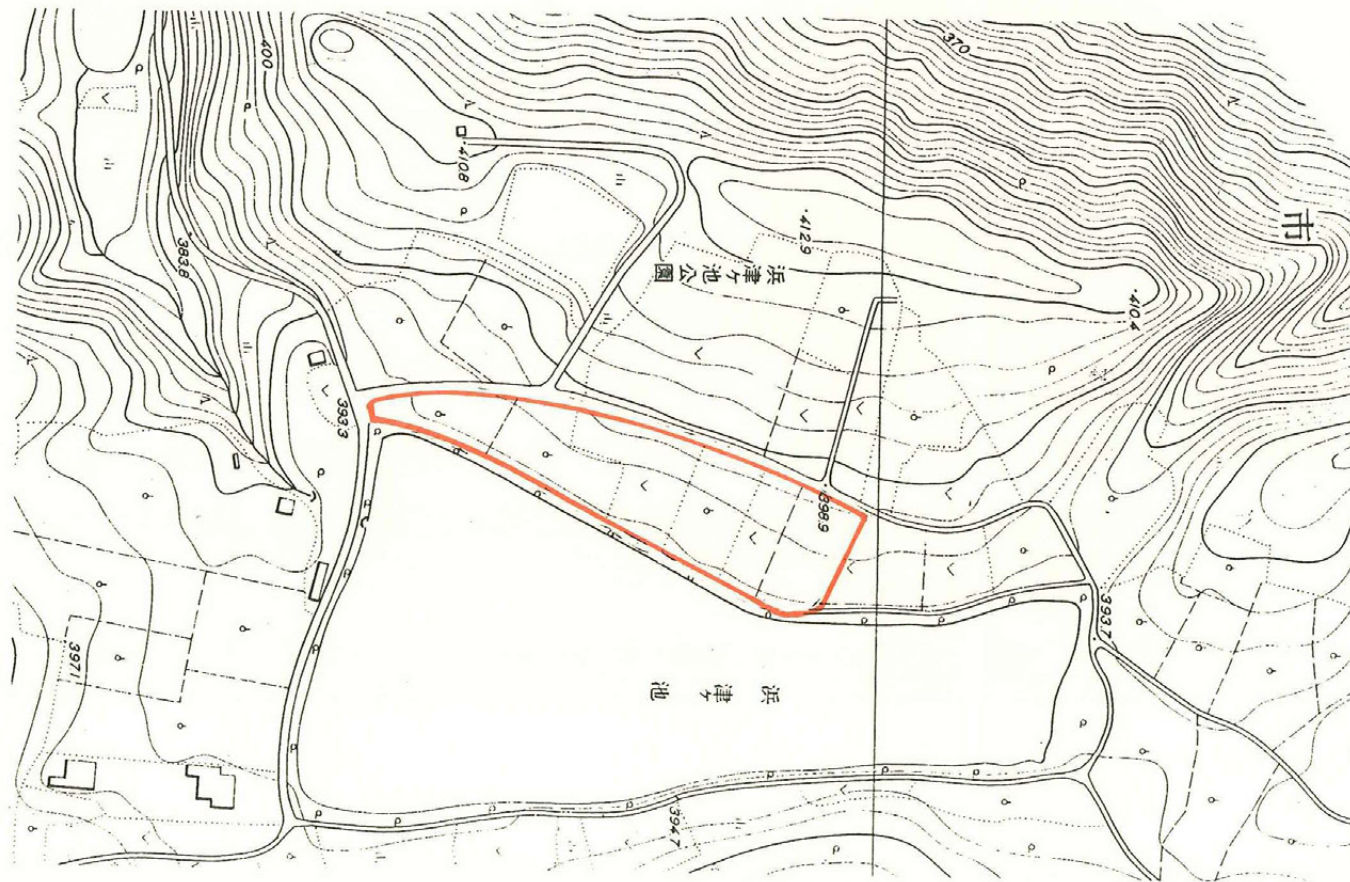
(池田 実男)



第24図 土層模式図



第25図-1 調査坑設定図



第25図-2 調査地全体図

第3節 研究史概説

浜津ヶ池は、中野市最大の溜池で、いつ頃できたかはっきりしない。浜津ヶ池がかんがい用水として利用されたのは、江戸時代前期から栗林村の水田を潤し、田地を増加させた。しかし、現在のような姿になったのは、大正時代に改修・拡張工事がおこなわれてからである。⁽¹⁾

浜津ヶ池の西側一帯から石器が出土することは、昭和20年代の前半から神田五六氏によって注目されていた。しかし、これは岩宿遺跡の調査によって、旧石器時代の存在が証明される以前のことであり、これらの石器も隣接する栗林遺跡の弥生人の石鏃製作場と考えられていた。

昭和33(1958)年、金井汲次氏が黒耀石片を採取され、その剥離のようすから旧石器時代のものではないかと考えられた。⁽²⁾昭和35(1960)年には浜津ヶ池の西岸の農道改修工事にあたり、神田五六・金井汲次・宮沢(現高橋)桂氏によって調査された。この調査では、地表下60cmの白色粘土層から黒耀石片など、70点余りの石器が発見された。⁽³⁾その後、金井氏によって石器の数が追加され、数量では中野市内の旧石器時代遺跡のなかで最も多くなった。

川上元氏は、これまで出土した石器をナイフ形石器、彫刻器(単打形・凸形・平垣形)、搔器(先刃・挾入状・不定形・不定形細搔器)、石刃(大形・中形)・細石刃様組合せ石器に分類された。そして、これらの石器から浜津ヶ池人を、主としてナイフ形石器のような切る道具を所持し、尖頭器中心の時期に入る直前のナイフ期終末期に位置づけた。

さらに川上氏は、浜津ヶ池の他にも安源寺・立ヶ花など高丘陵における旧石器時代の時間的な流れを安源寺Ⅰ群石器→立ヶ花→浜津ヶ池→田麦陣場→安源寺Ⅱ群石器という順序で把握されたとした。また、材質に黒耀石を用いた石器が多いことから、南信の八ヶ岳山麓の文化に非常に近く、東北の東山文化系文化・新潟県地方の該期文化と地域的なつながりが、うかがえると特徴づけている。⁽⁴⁾

(酒井 健次)

文 献

- 1) 田中 毅 「栗林」『水とむら』 昭和62(1987)ローカル双書
- 2) 神田五六 「無土器時代の遺物を出した浜津ヶ池」『信濃』Ⅲ13-6 昭36(1961)
- 3) 中野市 『中野市誌』歴史編(前編) 昭和56(1981)
- 4) 金井汲次・川上 元 「長野県中野市浜津ヶ池と立ヶ花遺跡発見の先土器時代遺物」『信濃』Ⅲ19-7 昭42(1967)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺 構

本遺跡の調査は、昭和35年に神田五六氏・金井汲次氏・高橋桂氏によって調査が行われたのが最初であることは先述のとおりで、70余点の出土遺物を得たほかには、その出土遺物の分布状態から該期の住居址の規模を推測するにとどまっていた。今回の調査は、調査溝の規模的制約はあるものの広範囲にわたる本格的な調査としては、最初の例となった。

調査は、畑かん送水管埋設予定ラインを便宜的にA～M（C欠）の7ブロックに分け、そのブロックを2m間隔に小分割したグリッドを埋設して実施した。

以下、ブロック毎に検出された遺構について述べる。

Aブロックについては、掘削深80cmの限界まで掘り下げたが遺構・遺物の検出はなかった。ちなみに80cm掘り下げた段階でわずかにローム層が、確認される状態であった。

Bブロックは、今回調査したブロック内で特に検出遺構の多かったブロックである。B-5グリッドを中心に検出された遺構（第28図）は、不整形の形状をもつ土壌であり、表土より25cm下の地点で、範囲内における最大深は10cm程度と極浅いものである。今回の調査の範囲内においてその関係にまで言及することは不可能であるが、この土壌の北側1mの位置に焼土（80cm×30cm）が検出されている。なお、両遺構とも遺物の伴出はなかった。

B-8～10にかけて検出された遺構（第29図）は、両遺構とも、表土下25cm程度に片側あるいは両側を調査溝側壁に切られる状態で検出された。D₂は最大深5cmの平坦な底部をもつ土壌である調査溝内での幅は70cmを測る。D₃は、東西方向に長軸を持つ土壌であるが、ほとんど平行に調査溝を横断しているため溝状遺構の可能性も考慮したが、底部の形状、最大深10cm程度であることから、現在の段階では土壌として考えた。

B-20～22グリッドにかけて検出された遺構（第30・26図）は、表土下25cm程度に調査溝を北東から南西に横断する形で60～70cmの



第26図 B-20～22 遺構写真

間隔で一直線上に並ぶ6つの柱穴とP₆の南側にP₁～P₆に伸びる線から120°(LP₆P₇)の角度と60cmの間隔を持ってP₇が検出された。形状はP₁～P₇にかけてまちまちではあるが、底深は20cm前後とある程度の統一性を見出すことは可能ではないか。方形に近い建造物の柱穴列の一片を示すものであろうか興味のあるところである。なお遺物の伴出はP₁～P₇すべてにおいて皆無であった。

B-23グリッド付近から検出された遺構(第31図)は、表土下20cm程度に検出された。P₇から2m南側に位置する2つの柱穴である。P₈、P₉とも底深15cm程度を測る。伴出する遺物はなかった。

Dブロック、EブロックともAブロック同様遺構と遺物の検出はなかった。

Fブロックから検出された遺構(第34図)は、調査溝を北西から南東方向へ横断する形で2本の溝状遺構が表土下30程度において検出された。M₁は、溝幅30cm(緑)、15cm(底)で、深さ20cm程度である。また東西の溝縁には、約10cmの段差が生じている。M₂はM₁より5°の傾斜をもち2mの距離に位置している。溝幅は40cm(緑)、15cm(底)で深さ15cm程度である。なお伴出遺物はなかったFブロックからは、F-6地点より黒曜石製の石器(第図11)が出土している。検出層は若干ローム層に食い込む状態であったが、落ち込み等の遺構は検出されなかった。

Gブロックから検出された遺構(第32・27図)は、集石をとまなう溝状遺構で、表土下30cm程の地点でローム層を掘り込む形で検出された。

M₃は北西から南東の方向に調査溝を横断する状態で、溝幅は約50cm(最小)～1m余、深さ70cmを測る。また南側溝縁部分に底径10cm、深さ15cmの柱穴(R₀)を有する。集石は、溝を塞ぎ塞ぎ止めるかの様に拳大よりやや大きめの河原石を不規則(3段に積み重ねられていた。今回の調査では、70cm程の確認であったが、調査溝側壁の状態から、これ以上集石が長く続いている可能性は少ないようである。また集石を取り除き地下の精査を行ったところ径15cm、深さ7cmの柱穴(R₁)が検出された(第33図)伴出遺物はない。

G-7グリッドから検出された遺構(35図)は、調査溝をはほぼ垂直に横断する状態で表土下45cm程の地点において検出された溝状遺構(M₄)である。溝幅は50cm、溝深は30cm前後である。溝縁は南地10cmの段差を生じている。溝底にはG-4より検出さ



第27図 G-7遺構写真

れ溝状遺構と同様に、底部に径12～3cm、深さ10cm程度の柱穴が検出されている。共に遺物の伴出はない。

H～Mブロックにかけて、遺構・遺物の検出はなかった。

第2節 遺物

今回の調査によって検出された遺物は、後期旧石器時代に比定される石器2点である。以下に表採された2点の石器と極細片の土師器（図示省略）を含め観察結果を記する。

石器

（第36図1） B-12グリッド出土の粘板岩製石器である。石核より剥離した後、裏面に剥離面の大きな深形調整が数回ほどこされている。側縁部への刃部作り出しのための調整剥離は、ほどこされておらず、円形搔器の未成品ではないかと思われる。

（第36図2） 粘板岩製の表採遺物である。裏面への調整剥離はほどこされていない。側縁部への調整は表裏とも認められない。搔器としての可能性が高いが、断定はできない不明確な資料である。

（第36図3） 黒耀石製の表採遺物である。表裏両面に整形のための調整剥離面をもつ、縦長不整剥片石器である。刃部作り出しのため上部より4cm程度の調整剥離面がなされた彫刻器である。

（第36図4） F-6グリッド出土の黒耀石製石器である。表裏両面に整形のための調整剥離面をもつ、縦長不整剥片石器である。図版上側端部の調整及び、その形態から、錐、有茎石器、尖頭器（未成品）との3例の可能性があるが、現状では錐として明記しておく。

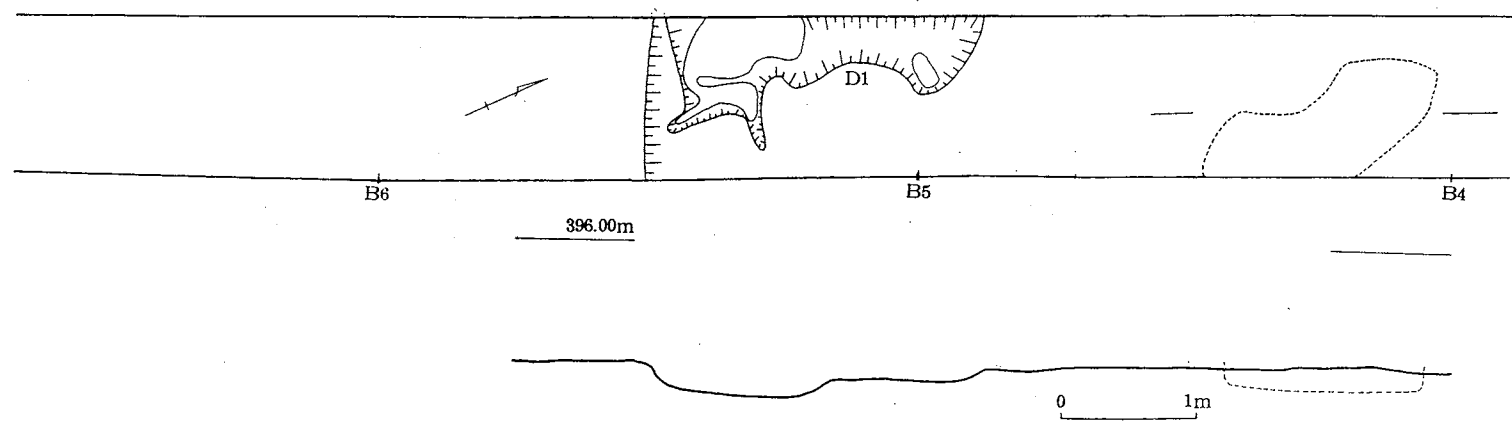
土器

すべて極細片のため図示は省略した。すべて池岸縁より表採遺物である。器形、時代についても不明である。

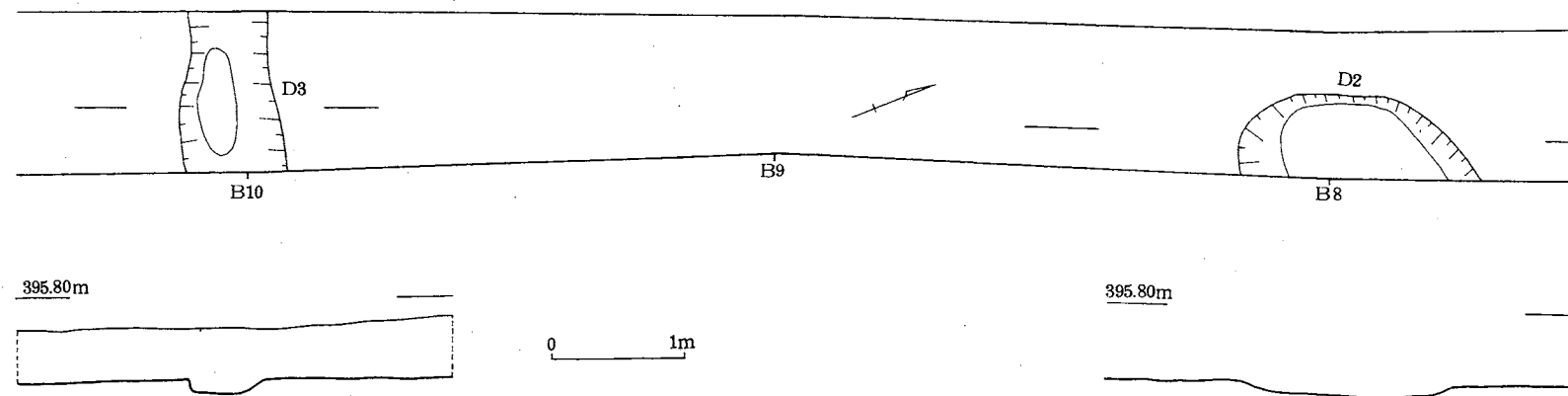
以上が今回の調査によって検出された遺物であるが、その数、石器4点、土器数点という極少数であったこと重ねて遺構に伴って検出された遺物が1点もなかった。その性格の究明に対して、十分とは言える結果が得られなかったことは、とても残念なことである。

その現状として考えられることは、調査地区が変則的に限定されたことも起因していることも考えられるが、それ以上に表採遺物がすべて浜津ヶ池岸縁より検出された資料であることから、当遺跡の中心部分が、より池側ましてや現状の地の中に入った部分に存在する可能性が高いことを意味しているものと思われる。

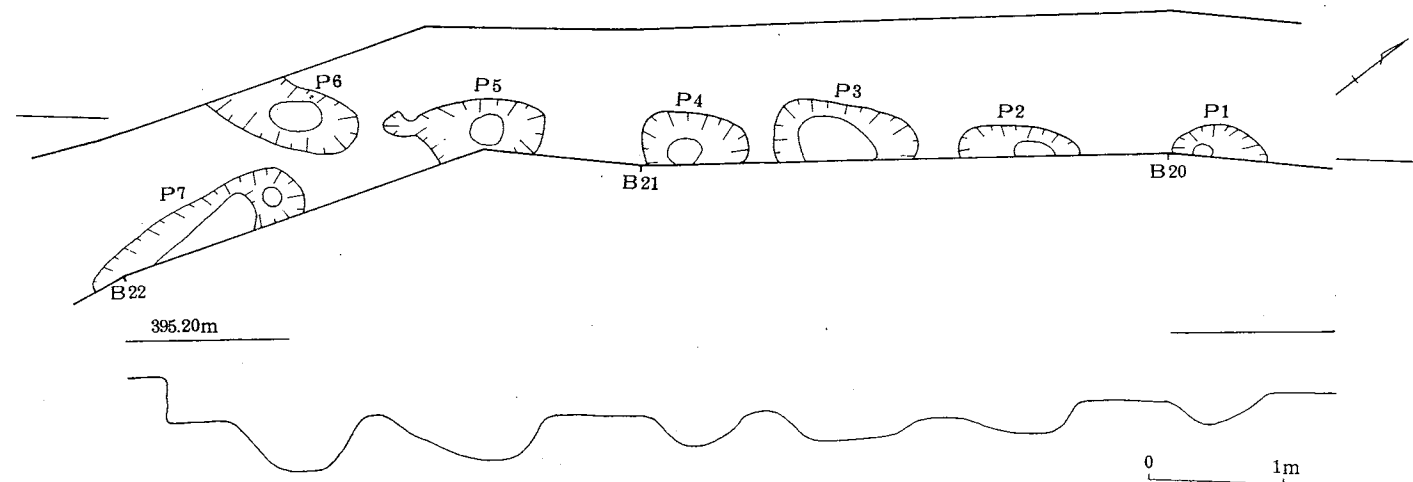
（徳竹 雅之）



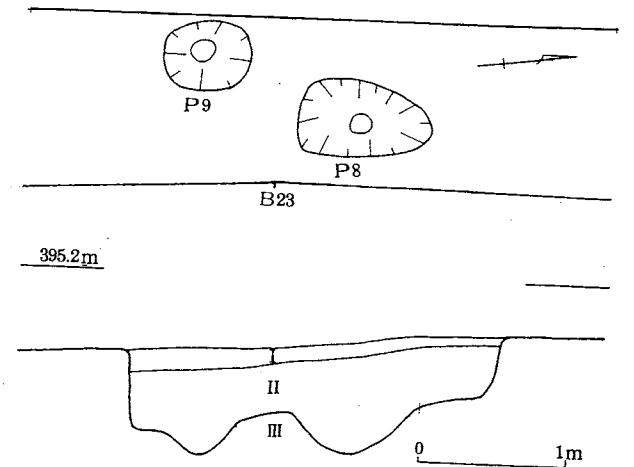
第28図 浜津ヶ池遺跡B5遺構実測図



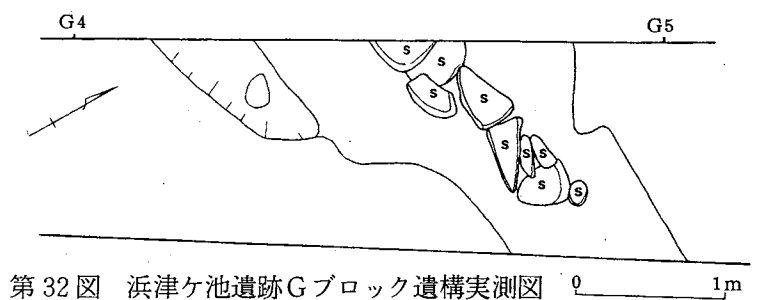
第29図 浜津ヶ池遺跡B-8～10 遺構実測図



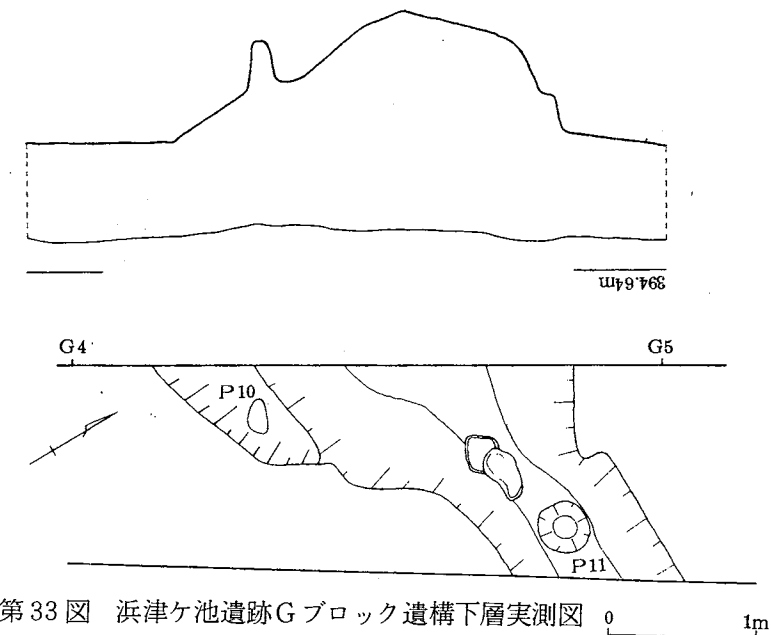
第30図 浜津ヶ池遺跡B-20～22 遺構実測図



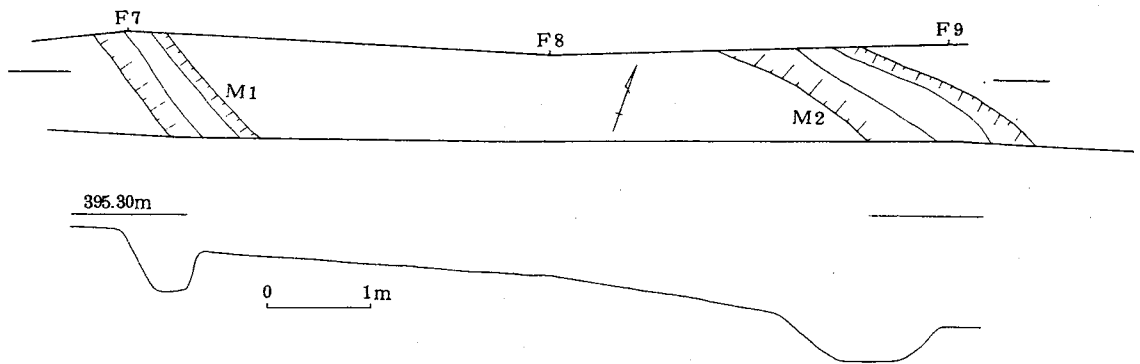
第31図 浜津ヶ池遺跡B-23 遺構実測図



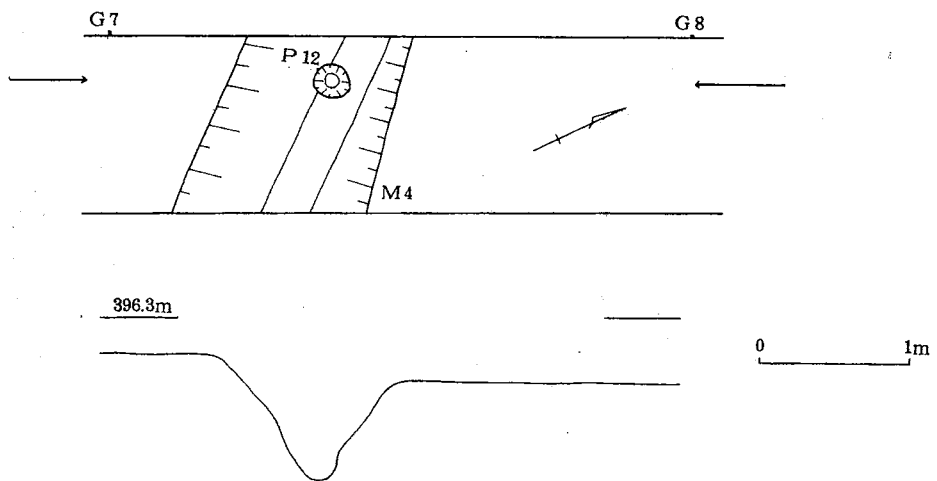
第32図 浜津ヶ池遺跡Gブロック遺構実測図



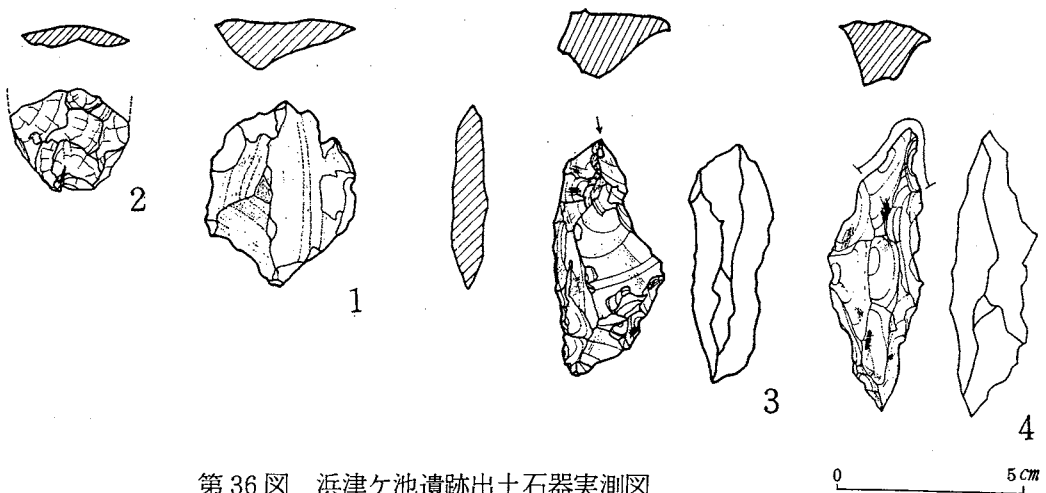
第33図 浜津ヶ池遺跡Gブロック遺構下層実測図



第34図 浜津ヶ池遺跡Fブロック遺構実測図



第35図 浜津ヶ池遺跡G-7 遺構実測図



第36図 浜津ヶ池遺跡出土石器実測図

第3章 結 語

今回の調査を通して検出された遺構は、柱穴12、土壇3、溝状遺構4であった。

すべての遺構についてⅢ層のローム層を掘り下げて形成している点では共通しているものの、先述したとおり、すべての遺構にも伴出する遺物が1点もなかったため、個々の時代判定並びに性格、また遺構間での関連性など解明不可能であった。しかし、単独出土ではあるが、遺構と同一レベルから検出された旧石器時代に比定される石器が調査地区内において出土した唯一の遺物であることから、該期の遺構の時代判定の寄り所となるかとも推想されるが、あくまでも推定の域を越えないところである。

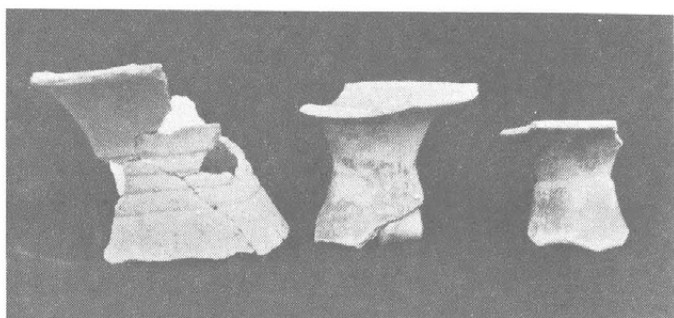
今回の調査にあたって、遺跡の分布を解明することもその目的の1つにあったが、遺構の検出がB・F・Gブロックの標高395.80m前後のラインに限られたという結果は、これまでに本格的な調査のなかった本遺跡の分布を確認する上では一つの成果と受けとめることができよう。

しかし、反面遺構・遺物の実際の検出はあったものの、その状況から単発的な感を与えることは事実である。今回の調査においても表採された遺物がすべて池岸付近からのものであり、過去の調査の成果から考えても、やはり遺跡の中心部となる範囲は池岸より池中にかけて広がるものと考えた方が正解であろうと判断する。

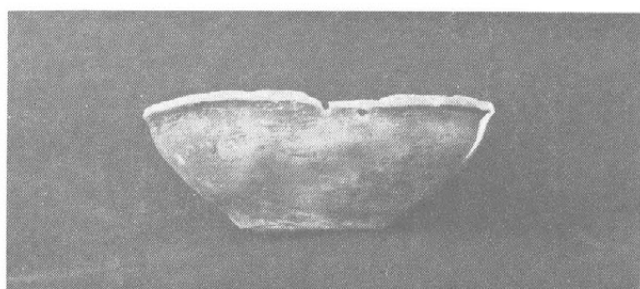
今回の様な調査地区の設定について変則的な制約をうけての調査は、前年度調査の安源寺遺跡の例に続いて市内では2回目の調査である。工事及び調査によって破壊される遺跡の規模を最小限に止める点では、遺跡保護の立場から十分に評価されるべきことであろうが、いざ検出された遺構、遺物の性格等と平面的な立場から究明しようと試みた場合、多くの点において支障を生じさせる結果に通じてしまうこともまた事実である。この点については、より十分な検討が必要であろう。

(徳竹 雅之)

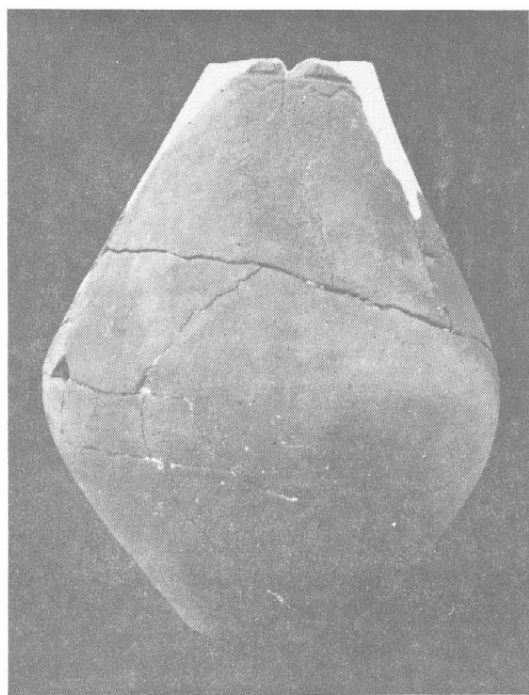
圖 版



左・25-8、中・25-7、右25-9 地区出土土器 (第13図左16、中17、右15)



25-7-12 地区出土土器 (第12図4)



25-8 地区出土土器 (第13図20)



25-9 地区出土土器 (第12図5)

昭和62年度出土土器

栗林・浜津ヶ池発掘調査報告書

昭和63年 3月10日印刷

昭和63年 3月18日発行

発行 中野市教育委員会

長野県中野市三好町 1-3-19

印刷 カナイ美術印刷
